

# まどまぎ式☆霊界ナビ

サムズアップ・ピース

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

この世界は、山あり、谷あり。人生は、決して平坦には生きられない。

私は、そんな人生の「終わり」に立ち会う。

「物語」なんて、そんな大したものじゃない。

これはただの、私達の「仕事」のお話。

最近まどまぎを観ていてハマってしまい、観ている内に出来てしまった物語です。TV最終回く叛逆の物語までの何処かにあったかも知れないお話。

原作は大河ドラマっぽかったので、これは1エピソードずつが印象に残る様な、バトル以外の所の比重がより大きいお話にしたいなと思っています（第一話時点では）。

因果とか、仏教にも多少縁のあるストーリーでしたが……この話では導かれた魔法少女達の魂を、日本の古典的な亡者や幽霊の様な解釈で描いています。ファンとして、こんな話絶対に認めないからな、みたいな方もいらつしやると思います………すいません………

投稿は初めてですが、宜しくお願いします！

9 / 10 追記

pixivでまとめ版投稿始めました！

この小説は実在の人物・団体等とは一切関係ありません。念の為。

# 目次

## 第1話 渥美ヤマネ、15、野乃中市

1	山の貴女は空遠く	1
2	光の使者、ブルーマーメイド	
10		
3	ヘブンス・ナビゲート	20
4	やまあるきのジレンマ	25
5	お山の代償	31
6	ロストホープ	38
7	セワスイー部長	41
8	負の自然なガール	47
9	木(ボク)の鼓動(rhythm)	57
	を聴いてくれ	57

10	あばよ幽鬼(ユウキ)、宜しくナミダ	63
----	-------------------	----

## 第2話 芽育奈尾、13、風見野市

1	希望の都市	72
2	ウエイスト・サイドストーリー	
84		
3	泣き夜風呂(なきよぶろ)	88
4	コールド・ブルー	93
5	美樹との遭遇	97
6	ブルー・シャドー	103
7	ドント・ストップ・ミー・ナオ	
112		

8 魔女教会で会いましょう | 118

2 思い出ボロボロ |

168

9 お前を魔法少女にしてやるから魔  
獣を倒してくれ! | 125

10 決めたよP u e l l i a M a g

i | 131

11 煮える海、割れる大空、終わる大

地 | 138

12 @マジック天国 | 142

13 渡物語ワタシモノガタリ

150

第3話 操つばめ、14、高原市

1 よくもこんなマジアレコードを!

162



# 第1話 渥美ヤマネ、15、野乃中市

## 1 山の貴女は空遠く

それが一番いいと思います

真夜中の某山中。

閃光、爆発。

そして呻き声を上げながら、巨大なヒトガタが幾つも塵となって崩れていった。

☆ ☆ ☆ ☆ ☆

その数分後。

「……………みんな、粗方回復は終わったか？」

アメリカか何処かの軍人の様な格好をした少女が、周りに座り込んで休んでいる他の少女達に声を掛ける。そのきびきびした言い方には、リーダーらしい雰囲気があった。

「うん、大丈夫だよ。ほら、さっきまであんなにどろどろに濁ってたのが嘘みたい」と言って、その中の一人、海賊船長の服を着た小柄な子が、暖かい様な冷たい様な、強い光を放っている不思議な宝石を差し出して見せた。

よく見てみると、少女達の服にはみんな何処かに海賊の子のと同じ様な宝石が付いて

いるのが分かるだろう。色やデザインにそれぞれ個性はあるが、どの宝石も同じ様に周囲の闇を照らして強く輝いている。

「この所不漁だったからな………苦しい戦いではあったが、これ以上『狩り』が出来ない状態が続いていたら、みんなお陀仏になっていた所だ。

それにあれだけの数の『魔獣』、町まで出て行っていたら、目も当てられない大惨事になつていただろう。

本当に危なかった………」

そう言うと、軍人の彼女も周りの仲間達がやっている様に、小さなサイコロ型の黒い物体を幾つも自分の宝石に当てた。

軍人、海賊、他にもヒラヒラした飾りが付いたアイドルの衣装の様な物、アニメキャラか何かの格好を真似た物、鎧の様な物………知らない人が見たら、コスプレかハロウインの仮装と勘違いするだろう。しかし、彼女等は別段遊んでいる訳でも無いし、ふざけているつもりも無い。

何故と言つて、彼女達が腰や肩や背中に提げている物をよく見てみるがいい。

銃や剣等………それらは飾りなどでは無く、実際に相手を殺傷出来る本物の凶器、いや武器だ。

グリーンフキューブ………彼女達が戦いに勝利し、その報酬として与えられる唯一

の物。

彼女等の活躍は普通の人々に知られる事は無く、従って励ましや声援も無く、自分達同士で慰め合うしかない。

その代わりに得られるこのちっぽけなキューブは、彼女等にとつてある意味食べ物等よりもずっと生きていく上で重要な物だ。

魔獣……人間の強い感情に引き寄せられ、熱エネルギーへと変換させたそれを根こそぎ吸い取り、廃人にしてしまう人類の天敵……その姿は普通の人間の目には映らず、高性能の軍事用レーダーだろうと当然感知出来ないのです、存在そのものが虚無に近い可能性はある。とすれば、生物と言うよりかは寧ろ、自然現象の類いか。

そして彼女達は、魔獣の手から人々の希望を守る者。

魔法の使者との契約を結ぶ事によつて各々が望む奇跡を叶え、それと引き換えに戦い続ける運命を受け入れた少女達。

その名も魔法少女。

魂ソウルの宝石ジュエルから完全に穢れを吸い出すと、軍人の子はふと、仲間の一人に目をやる。

「……………リホ？ どうした？」

リホ、と呼ばれたネズミの耳と尻尾を付けた子は、さつきから一心不乱に森の奥の方をじつと見ていたり、茂みの中をがさがさ探ったりしていた。

「どうした、つて?」

「落ち着かない様子だから気になったんだ。何をそんなに慌ててるんだ?」

「みんな本当に気付いてないの?」

.....ヤマネが居ないわ。ヤマネは何処?」

少女達が互いに目を合わせたか、それらしたりする。ひらひら、ふわふわと視線が泳ぐ様は、飛び交う虫を眺めている様でもあった。

「おかしいのよ、さつきまで近くにいた筈なのに。魔獣共に追い詰められた時、あたし達の攻撃を上手く躲してたの、みんなも見たわよね」

『リホ』の言う通り、確かに彼女達には、ヤマネ、という、巫女の服を着た仲間がいた。魔法少女達のエネルギーが殆ど底を付き、魔獣の大群に取り囲まれた時、ヤマネは自ら前に出て、叫んだ。

みんなこいつ等を撃って、わたしごと撃って、と。

その時の彼女の全身は、緑色の炎に包まれている様に見えた。

魔獣は人間の感情を餌にしているが、魔法少女の行使する魔法のわざもまた、夢や希望といったポジティブな感情が素になっている。

魔法少女の中でも抜きん出て強い力をもった者には、魔獣の方から寄って来た例もある。

ヤマネは自分の内側に残ったありったけの感情エネルギーを燃え盛る程に振り絞り、オーバーヒートさせたのだ。

恐らく彼女の狙い通り、全ての魔獣が砂糖に群がる蟻みたいにヤマネの所に集まって来た。

他の彼女の仲間達は、その魔獣の団子目掛けて一齐に攻撃を叩き込んだ。

光の束が直撃する寸前、ヤマネは自分を持ち上げていた魔獣の手を蹴つ飛ばし、パツと脇に飛び退いてくると宙を舞う、その一秒後に爆裂が起こった。

「攻撃を躲してたの、みんなも見た筈でしょ？あその後爆風で一瞬周りが見えなくなったけど、あたし達が平気だったんだから、魔獣共から同じ位の位置にいたヤマネも無事な筈………ねえ、誰かヤマネを見てない？みんな知ってると思うけどあいつどっか抜けてるからさ、きつとさっきの爆発でどっかに吹き飛ばされて道に迷ってるって所じやないかとあたしは思うんだ、うん、きつとそうだよ。もう夜も遅いし、夜の山の中で放つといったら危ないし、冷えるし………」

「もうとつくに連れてかれちゃったんでしょ、あの人」

と、いきなりリホの言葉を遮った者がいる。

黒いシルクハットを被り、木にもたれかかったその少女に、みんなの視線が集まる。

「連れてかれちゃったって何よ、ルル。何言ってるの？」

「だから、言葉通りの意味だよ。ヤマネはもうこの世には居ないんだ。

事実をちゃんと見てないのはどっちな訳？もう一回ちゃんと思いついてみたら」

ヤマネが地面に着地した直後、炎の波が巻き起こり、ヤマネと、それ以外のメンバーの間を隔てた。

火炎はまるで赤いハンカチみたいにヤマネの姿を見え隠れさせてひらひら揺れる。

「……………つちに来て、ヤマネ……………そこは危ないよ……………炎が来ちゃう……………早く、こつちに……………」

倒れて強く手を伸ばすリホに向かって、真つ直ぐ立ったヤマネは微笑んで何事か呟いたかと思うと、それこそマジックで消されてしまったかの様にフツと姿を消してしまつた。

「ほら、ヤマネが消えちゃつたの、リホはちゃんと見て無かつたの」

「それは……………炎の感じでそう見えただけよ」

「違う、違う。だから現実が見えて無いんだって。あの人さ、自分は一番年上なのに、一人だけ役に立てて無いって、よく気にしてたじゃない。せめてみんなが頑張つた分多めに使つてって、自分の分のグリーンフキユープまで人にあげちゃつてさ。ただでさえあの人ソウルジュエムは、みんなのよりも濁つてたんだよ。そこへ持つて来てあんな無茶苦茶やつたでしょ。魔力を完全に使い切つちやつたんだよ」

「ルル……」周りの魔法少女達が止めに入ろうとする。

「本当はしっかり理解してんだよね、みんなもねえ」「ルル」は喋るのを止めない。

「ヤマネはとつづくに『円環の理』に引つ張られて逝っちゃったんだ」

原因と結果——主に仏教では、この二つをまとめて『因果』と呼ぶ。

自分の物を他人にあげたり、一時だけ損をして『原因』を作つてやれば、それは良い『結果』となつて自身に還つて来る。逆もまたしかり。

ちよつと捻つて解釈すれば、この世界は良い事と悪い事——例えば希望と絶望も、全てが差し引きゼロになる事で成り立つているとも言える。

魔法の宝石・ソウルジェムが、限界まで濁り切つたら、どうなるか。

つまり、少女達が魔力を使い果たしてしまうとどうなるかという、ある意味、普通に死ぬより哀しい結末が待っている。

円環の理……それは、魔法少女達の間で、伝説として伝わる存在。

戦う役目を終えた魔法少女を、身も心も完全にこの宇宙から消し去つてしまふ、救いの女神にして死神。

魂に一杯の穢れを溜め込んだままこの世に留まつていたら、いずれ最初に奇跡を願つた因果が、巡り巡つて呪いを撒き散らしてしまう。そんな事になる位なら、一瞬で消え

てしまった方が、寧ろ世にとつては救いと云う物。希望は絶望に。絶望は希望に。差し引きゼロ。それが世界のルールなのだ。

「馬鹿な事言つてんじや無いわよ、ルル」リホがルルに掴み掛かった。

「はつきりした根拠も無いのに、適当な事ばつか、ぺらぺら、ぺらぺら……」

「はつきりした根拠ならある。みんながそれを見た。みんなも、あんたも」一方のルルは、リホの事などお構い無しで、調子を変えない。

「………仮にそうだとして、何であんた、そんな平気な顔してられるの!………」

リホの声に嗚咽が混じり始めた。

「みんなだつて同じよ………みんな、ヤマネの事が心配じゃないの?………ヤマネにもう………二度と………会えないかもしれない………云うのに………みんなは悲しくないの?………」

ねえみんな、ヤマネとあたし達は………」

そこまで言葉を絞り出して、リホはふと気付く。

揺さぶられた振動の所為だろうか、胸ぐらを掴まれたルルの目一杯に溜まっていた涙が、つうつと一本の筋となって流れ落ちた。

「………ごめん、リホ。お前の言う通りだよ」二人の間に、軍服のリーダーが割つて入った。

「何て言うのかな……何時かは誰かがこうなるんだって、頭では分かっていたつもりなんだけれど……いざ、実際になってみると、実感湧かないって言うか……認めたく無かったんだろうな、やっぱり……」

目を涙で潤ませているのは、軍服の子も一緒だった。

悲しく無い訳などある筈が無い。消滅したのはみんなにとって大切な仲間で、友達なのだから。

ただ、人には人それぞれの悲しみ方があるだけなのだ。取り乱して泣きじゃくるのも悲しみなら、静かに噛み締めるのも悲しみだ。勿論、自棄になって当り散らすのも。みんなが空を見上げた。各々の、彼女と過ごした一番良い記憶を思い出しながら。

「……………ヤマネ……………」

## 2 光の使者、ブルーマーメイド

渥美ヤマネは戸惑っていた。

仲間と協力して、魔獣の群れを一掃したのは覚えている。

消え去る運命を悟り、薄れて行く意識の中で、リホちゃん、みんな、バイバイと静かに呟いた、此処までは確かに記憶にある。

が、問題はこの後から。

「……………おおい、起きなよ、あんた。起きなさいって」

声が聞こえて目を覚ますと、ヤマネは自分がさっきまでと同じ位置に突っ立っている事に気が付いた。

「無茶するわよねえ、あんた。まああたしは嫌いじゃないけどさ、そう言うの」

白いマントと手袋に青いミニスカート。ショートの髪に付けた、音楽記号型のヘアアクセサリーがアクセントになっている。

突如として眼前に現れたこの見知らぬ少女は、状況が飲み込めず狼狽えるヤマネを尻目に、さっさと自分の作業に取り掛かり始める。

「えーつと、今は一体、何時の何時だったっけか。もうすぐ係の者が来るから、ちよーつ

と待っててね〜」

マントの子はポケットから金の懐中時計を取り出して見た。

「あ……………え？あの、ちよつ、え？え？」

「だあーつ、駄目だなあ。大事に使い続けて来たけど。狂い過ぎててちよつとお話にならないわ、これは」

彼女は懐中時計をぽいつと放り捨てると、普通の女の子がよくやる様に、携帯を取り出して時刻表示を確認した。

『98:03 20月63日（什曜日）』

「うん、もうすぐだね」

いよいよ不安になって来るヤマネ。この世の者ならざる雰囲気を放つ謎の少女を凝視しつつ、ちらりと横を見やると、少し離れた所に疲れ果てた様子の自分の仲間達がいる。自分はさつきまで仲間達と一緒に戦っていた事を今更の様に思い出した。

戻ろう、と強く思う。理解は出来ていないが、この非現実じみた、夢の中の様な状況から、早く抜け出さなくては。

いつものみんなが待っている、大変だがそれなりに楽しみもある魔法少女の日常に、早く戻らなくては。

その時、背後から誰かに見られている気配を感じた。

人間の何倍も大きなくしんぼうを想像出来るだろうか。

袈裟を纏ったつくしんぼうの様に背の高い男が、しゃがみ込んでヤマネ達を覗き込んでいた。

(魔獣……………全部倒したと思ったのに……………！)

改めて周りを見てみれば、同じ姿をした巨人が3、4匹、ぬらり、またぬらりと森の闇の中に溶けて行っていた。

あれだけの数、爆発を受けてもどうにか生き残れた魔獣が幾らか居たのだろうか？仲間を一気に減らされて分が悪いと判断したのか、めいめい腕や胴体の一部が燃えて無くなった魔獣達が、森の方に退散して行く。

しかし、この一匹は依然としてヤマネ達を視ている。

ヤマネはいつもの様に、魔法で自分の武器を召喚しようとした。

(あれ?……………あれ!?)

しかし、いつもの光球を放つ仙人杖は、中々彼女の手の中に現われてくれない。

「リホちゃん！ルルちゃん！みんな！助けて！」

彼女のいつもの仲間達は、惚けた様に座っているだけだ。しかも誰も彼女の方を見ていない。

「リホちゃん！ルルちゃん！みんな！」

聴こえる自分の声も、何だかいつもの声とは違うみたい。

「……………んー？そっか、こいつらには見えてるんだ」

携帯をいじっていたマントの子が顔を上げ、魔獣の顔とにらめっこした。

「リホちゃん！ルルちゃん！みんな！」

「まあまあ、そう慌てなくても」

「なんでそんなに落ち着いてるの！」

ついにヤマネは話し掛けてしまった。こっちは必死だと云うのに、そんなに落ち着き払った態度を取られたら苛々もする。

「こっちはじぶんのいまの状況も分かってないのに！あなたはいつたいたいだれなの？係のものってなんなの？いまはいつのなん時だつて……魔法少女だよ？この町の子じゃないよね、どこからきたの？」

自分だけなんでも知ってる風にはらへらして！あなた、わたしをばかにしてない！？っていうか、よく見たらひよつとしてあなたわたしより年下なんじゃないの？ため口使つて、『嫌いじゃないけどさ』じゃないよ、ふざけないでよ！

いいかげんに……………」

し……………」

パニックを起こしたヤマネに、マントの子がそう、長く、尾を引いて静かに言うと、周

囲の空気がしーんと冷えて、静まりかえった。

そして、彼女はじつと動かない魔獣を見やると。

「……とつと行きな。あんた等の出る幕じやないよ」

低い静かな声の意味を理解したのか、しなかったのか、暫くすると魔獣は仲間達の待っている闇の中に這入<sup>はい</sup>って行<sup>い</sup>った。

それから数秒間、ヤマネは固まったまま動く事が出来ず、マントの子も暫く魔獣が歩いて行<sup>い</sup>った方をじつと見ていたが、やがて彼女は夜闇に不釣り合いな太陽の笑みと共に振り返ると、

「……………ごめんねえ、ちよつと展開が急過ぎたよね。それで？知りた<sup>い</sup>事は何だっけ。今の状況。おつけー、分かった分かった。ゆっくり説明するから、取り敢えず先<sup>ま</sup>ずは落ち着いて……………」

彼女がそこまで言<sup>い</sup>った時だった。

がら〜〜〜ん　ごろ〜〜〜ん　がら〜〜〜ん

……………と、何処か遠くから重くて低い鐘の音が聞こえて来たのだ。

その時ヤマネの脳裏に蘇<sup>よみがえ</sup>ったのは、死んだじいちゃんが小さい頃寝物語に話してくれ  
た山の妖怪の話だった。

山に住んでる妖怪は、何故か大きな音や声を立てるのが好きなんだ。本当はそこには

何も無いのに、木が切り倒されたような、ズズーンという音をさせる物は、一番よく居る。「太兵衛、来い」とか、「雷蔵、おいで」と、誰かの名前を呼ぶのも居るな。昔、声が聴こえたと言つて、雷蔵と云う子供が森の奥の方に入って行つたきり、それから帰つて来なかつたということだ。山の中に家を建てると、天井裏からパラパラと豆を撒く音が聞こえる事もあるんだぞ。

山に向かつて勢い良く声を掛けてご覧。同じ声で返事が返つて来るだろう。あれは、山の向こうに目や耳の良い妖怪が居て、からかつて居るんだよ。

そいつには、山のこつちに居るお前の顔も、しつかり見えているんだぞ。身体が震えて来た。

ヤマネは何がこの世で一番嫌いだと言つて、ホラー系全般がまるで駄目なのだ。遊園地のお化け屋敷など、生まれてこのかた入つた事が無い。

じいちゃんは意地悪な人で、寝る前にわざと妖怪の話をお聴かせ、子供の頃のヤマネが怖がつてしがみついて来るのを見て笑つていた。

今、聞こえている鐘の音も、山の妖怪が鳴らしているのだろうか。

ヤマネには見えていないが、夜目の利く口が耳まで裂けた恐ろしい形相の妖怪が、もうすぐそこでヤマネの姿を見つめているのだろうか。

マントの子も動きを止め、その鐘の音にじつと耳を澄ましている様だった。

鐘の音は段々と大きくなり、やがてすぐ近くで鳴っているのと同じ位の音量になると、途端にパツ、と辺りが明るくなった。

「……来たね。さあ、宜しく頼むよ……！」

マントの子がそう呟いた。

夜の森を真昼の如く明るく照らしたのは、空中に浮かぶ大きな魔法陣だった。

ヤマネは思わず顔に手を翳すが、その強く眩しく、それでいて何処か神々しくて、包み込む様に暖かい光に見とれている自分に気が付いた。

暫くすると、魔法陣の中から、光に包まれた何かが少しずつ出て来た。

発光している為に判然としないが、それはどうやら人間の脚、それもヤマネと同じ少女の脚に見えた。

靴を履いた足首が完全に現れると、続いて脛、太もも、腰とお尻、ヒトの身体のパーツが少しずつ、少しずつ、少しくりと、少しくりと、ゆっくりと、ゆっくりと。

最早目を離せなくなっているヤマネは、一部始終をただぼうつと見つめていた。

時間を掛け、腰までが完全に姿を現すと、それは宙に浮いたまま突然動き出し、  
……………過激なホラー漫画かシユールなギャグみたく、狭い出口につつかえたか  
の様に、宙に浮かんだ人間の下半身だけがじたばたと動き出したかと思うと、やがてい  
きなり、

どすんっ！

……………と、人影が落下し、魔法陣は消えた。

「……………あああいつ！つあゝゝゝつ、腰いつ、腰、打った……………！」

「ちよつ、ちよつと大丈夫!？」

ハツと我に帰るヤマネ。一瞬、何が起きたのか理解出来ず、置いてきぼりにされるヤ  
マネ。

「ああすいません、大丈夫です、さやかさんお疲れ様です……………いやあでも、まさかあ

んなどこに出口が開くとは……………って、あわわわわ

落ちた衝撃で脱げた帽子を慌てて被り直すその子を、まじまじと見つめるヤマネ。

髪は短い、ふわふわしていてテディベアの毛並みみたいだった。外国のホテルマンか、郵便配達員の制服を思わせる、黒をベースに金のボタンや刺繍が悪目立ちしない程度に入った上品な、それでいて女の子らしく脚が出た衣装に身を包み、顔はと言うと、何と言うか、親しみ易さがにじみ出ている様だった。

肩には鞆かばんを斜めに掛けている。

「さやか」と呼ばれたマントの女の子に助け起こされたその少女はヤマネの方をちらりと見ると、「さやか」に質問した。

「……………こちらの方が、そうなんですか？」

「うん、そうだよ。この子があんたの、今回の担当」

「へえ……………はあく……………なるほどなるほど……………はい！分かりました！それじゃあ、張り切って！『ナビゲーター』のお役目を、果たさせて頂きます！」

自身の両のほつぺたをばしつと叩き、イテツと呻き、そしてナビゲーターを名乗った彼女は、帽子を取ってお辞儀をすると、すぐにまた被り直した。あまり身体から放したく無いのだろう。帽子の中央に嵌はまったタイガーアイに似た石は、生命いのちの輝きを放っていた。

「ご本人様確認をさせて頂くので、お名前とご年齢をお願いします」

「……………わたし？わたしは渥美ヤマネ、15歳」

帽子の少女は鞆の中からペンとキャンパスノートを取り出して書き込んだ。キャンパスノート？何故、キャンパスノート？しかも何か表紙に落書きが描いてあるし…

「ヤ、マ、ネ、さんと……………はい、結構です。この度は誠にお疲れ様でした。私達の美しい世界を守って下さって、本当にありがとうございます。『円環の理』に代わって御礼申し上げます」

「繰り返しになりますけど、本当にお疲れ様です。でも本当に大変なのはここからだと思っんで、お互い初対面になりますが、一緒に頑張りましょう。」

初めまして、ヤマネさんの『円環の理』へのナビゲーションを担当させて頂く、芽育めぐみ奈尾なおと申します」

### 3 ヘブンス・ナビゲート

地平線の向こうから大きな朝日が昇って来る。

光が山や麓の町を照らし、それは下界を優しく見守っている様に見えた。

「わーっ、綺麗な景色だねえ」

「ですよね〜……日が昇る所見たのって初めてですけど、何て言うか、上手く言えないですけど、人間って本当に小さな存在なんだなって……感動しちゃいますね」

両側のさやかと奈尾が感嘆しているのを見て、ヤマネも微笑んだ。野乃中市のなかは派手な物や名物が何も無い田舎だけれど、この自然だけは自信を持って誇れる物だとヤマネは信じている。

「そういつてもらえるとうれしいな。ここはずつとむかしからわたしたちをみまもってきてくれた、特別な場所だから」

深い山の中、木々が開けて光が差し込む場所で、3人は倒木に腰掛けて日の出を見ていた。死にゆく者の心境、と言うやつの影響もあるだろうが、何度訪れてもこの山の情景は心に染みる程大らかで、長閑のどかで、そして優しかった。ヤマネが子供の頃から変わらずここはそうだった。嫌な事があっても、何度でもその大ききで、心を綺麗に洗い流し

てくれる。

(それはきつと、よそからこの町にやってきたこのふたりにも伝わるんだよね)

木漏れ日と冷えた空気の下で、ヤマネ達の心は自然に優しく包まれていた。

自分は既にこの世の者では無くなっていると告げられ、『円環の理』へのナビゲートをする突然言われて、戸惑い、慌て、さつきまで取り乱していたヤマネだったが、大好きな山の空気を吸い込んだ今では、

(……………わたし、ちゃんと成仏できるのかな)

—————  
 なんて、落ち着いた気持ちで、いつそ他人事のように、ぼんやりと考えることさえ出来るのだった。

☆ ☆ ☆ ☆ ☆

『『円環の理』へのナビゲーションを担当させて頂く、芽育奈尾です』

「美樹さやかです」

と突然現れたこの二人に恭しくお辞儀をされても、ヤマネはまだ自らの現状を受け入れられなかった。当たり前前だ。現に自分は今ここに立っているのに、魔力を使い果たして消滅したなんて。

「分かってらっしゃるとは思いますが、魔力を使い果たした全ての魔法少女の魂は、『円環の理』に導かれないといけない事になってるんです。でない并希望を求めた因果がこの世に呪いをもたららしちゃったりなんかしちやつたりして、ちよつと收拾が付かなくなっちゃうんでね」

「はいっ、その魂を天上まで連れて行くのがあたしの役目ね」

「だけど『円環の理』の中って言うのは、神の世界、所謂天国なんで、現世への未練までは持つて逝けないんです。私がこうして喚ばれて来たって事は、ヤマネさんにも何か未練がある筈なんですよ。今のヤマネさんは魂だけの状態で、もう身体が無くなっちゃうてるんで、ヤマネさんの代わりにその手助けをして差し上げるっていうのが、『円環の

理』直属の『ソウルナビゲーター』の私の仕事って訳なんです」

「……………あのー、これってやつぱり、ドツキリかなにかじやないんですか」

「あのねえ、何処のテレビ局がこんなの仕掛けるつてのよ。魔法少女は一般人には秘密の存在なのよ？」

ほら、みんな本気で悲しんでるでしょ」

さやかに言われて向こうを見れば、確かにリホやルル達、ヤマネの仲間達が、こちらを全く気に掛けずに言い争っている。

「馬鹿な事言ってるじゃ無いわよ、ルル」リホがルルに掴み掛かった。

「はつきりした根拠も無いのに、適当な事ばっか、ぺらぺら、ぺらぺら……………」

「はつきりした根拠ならある。みんながそれを見た。みんなも、あんたも」一方のルルは、リホの事などお構い無しで、調子を変えない。

「……………仮にそうだとして、何であんた、そんな平気な顔してられるの!?!……………」  
リホの声に嗚咽が混じり始めた。

「みんなだつて同じよ……………みんな、ヤマネの事が心配じやないの?……………ヤマネに、もう……………二度と……………会えないかもしれない……………云うのに……………みんなは悲しくないの?……………」

ねえみんな、ヤマネとあたし達は……………」

(なんの最終回なの？これ)

「ねえ、リホちゃん、ルルちゃん、みんな！もう冗談はいいよ、わかったよ！わくおもしろかった、おもしろかったからもうおわりにしよう、っていうか、おもしろくなんかないよ！冗談だとしても、たちが悪すぎるよ！この子たち一体だれなの？！みんなの友だちななの？わたしにも紹介してよ！

ねえ泣かないでよみんな、そこに私はいないよ、眠ってなんかいないよ！

ここにいますよ！ここにいますよ！ここだよ！」

「あの、ヤマネさん、ちよつと落ち着いて…」取り乱しているヤマネを奈尾がなだめようとする。

「さわらないでっ！！ねえ、みんなあ！！」

奈尾を振り切つてリホ達に突進していったヤマネだったが、その身体は涙をこぼす仲間達をすり抜け、反対側に通り返けてしまった。

## 4 やまあるきのジレンマ

「奈尾ちゃんときゃかちゃんは、『円環の理』からわたしを連れにやってきた使いなんだよね」

木漏れ日の中、三人で歩きながら、ふとヤマネが質問した。

野乃中山ののなかやまは標高が低いのなが、その代わり空中から見た面積はやたらにだだっ広い。実は昔の豪族がが眠る古墳だと言う噂がある。

従って傾斜は緩く、山に遊びに来る子供達の遊び場となる場所は地面が踏み固められ、やがてけもの道ならぬ「子ども道」や「子ども広場」とでも言うべき物が出来上がる。

さつきまでは殆どパニックを起こしていたヤマネだったが、今はもう落ち着いた。

納得出来る訳など無いが、わたしがじたばたしてもどうにもならない事なんだ、と言う事だけは頭で理解出来た。わたしは未練を解いて、『円環の理』に逝かなきゃならぬい。

立ち去る前に最期の挨拶位はして行ったら、ときやかが言った。言葉は伝わらなくても、想いは伝わるかも知れない、と。

自分の姿を探して目の前で泣いている仲間達に向かつて、ヤマネは想った。

みんな、今までわたしをありがとう、こんな年上のくせにぐずでのろまで気がきかなくて、おまけに弱くて、いつでもみんなにめいわくをかけるようなわたしなんかを、今まで仲間と思ってくれてありがとう、と。

だからその後、リホがこう言ってくれて嬉しかった。

『ねえ、今、ヤマネの声がしなかった?』

「何?まだドツキリなんじゃないかって疑ってるの?」

さやかがニヤニヤしながら聞いてきた。

「ほんとですつてば。何でしたら身分証明書的な物もあるんですよ」

奈尾がバッグの中をゴソゴソまさぐるうとした。

「いや、それじゃあふたりは、天国からきた、天使さまってことになるのかな?つて、ちよつと思つたから」

ヤマネがたどたどしく言う。光の当たり方の問題なのかぱつと見分らないが、さやかの頭上には透明な、それこそ「天使の輪つか」の様な物が浮かんでいるのだ。自分の上にも手をやってみると、どうやら彼女の頭の上にも似た様な輪があるらしい。奈尾に

はそんな物は無かったが、彼女の身体が動く時には古い蛍光灯の下の様にその姿が揺らいで見えた。

ヤマネは自分自身の、例えばこんな所が嫌いだった。自分の思考を脳内で言葉に変換して、口に出すまでが他人ひとよりどうしても遅くなる。自分の思考を行動に移すとすると、もつと遅い。だから何時も他人に要らぬ誤解を与え、険悪な空気を意図せずに作ってしまう。だから仲間達にも、何時も迷惑ばかり掛けていた。

仲間か。

「天使かあ、まあニュアンスとしては間違つて無いですよね、さやかさん？」

「そうだね、そうなるかもね。まああたし等はそんな大したもんじゃ無いけど」

『『円環の理』って、奈尾ちゃんたちのことなの？』

「あの方はちよつと今、休みを取っておられます…私達はあくまで代理です」

「なにかあつたの？」

ヤマネが聞くと、二人は何も言わずに、ただちよつと顔を見合わせた。

ああ、聞いちゃいけない事を聞いちゃつたんだな、とヤマネは慌てて理解した。

ヤマネさんを現世に縛っている未練つて一体何なんでしょうね、と三人で考えた時、ヤマネはやはり、それはこの山の事だろう、と答えた。彼岸に逝つてしまう前に、もう一度だけこの山の中を歩きたい。



ゼミとクマゼミと、それで、あれ、オオカマキリまでいるね、カマキリは樹液を吸わないのに、ほかの虫をねらってるのかな、あとあれが、シロテンハナムグリにクロカナブンでしょ、それからあれがオオムラサキ」

「あ、他のは全く分かんなかったですけど、オオムラサキってのは聞いた事あるかもです」

「日本の国蝶だよ。よその森や山ではなかなか見られないんだから」

「随分虫に詳しいんだね」

さやかが言うのと、虫を夢中で紹介していたヤマネは照れ臭そうに笑った。

「昆虫学者になるのが、子どもからの夢だったんだあ……………」

……………このへんは人のすぐ近くに虫がいる、っていうか、もともと虫が住んでいたところに、人が住まわせてもらってるってかんじだったから、だから、虫は小さいころから、ぜんぜんきらいじゃなかった。

「だけどね、わたしが七歳のころ、スズメバチにさされて……………」

ヤマネが頭上の木にくっついていているスズメバチを見つめる。

「……………ものすごくいたくて、それで気が遠くなつたのを覚えている。」

それからわたしは変わらなずに虫が好きだったんだけど、虫にさわろうとするときのことを思いだしてこわくなるようになってしまった。でも、それじゃ昆虫学者にな

るのなんてむりでしょう？

だから魔法少女になるかわりに、こうおねがいのしたの。わたしをもちど、虫がさわれるようにしてください……って」

「……………ヤマネ……………？」

さやかが何かに気付いた。

「ヤマネさん……………？大丈夫ですか？」

ヤマネは、空を仰いだまま、声を出さずにぼろぼろと泣いていた。

## 5 お山の代償

「ヤマネさん……………」

ポロポロとしていた涙の雨だけは今や豪雨となり、膝からくず折れたヤマネは俯いて嗚咽を漏らした。

「ずるいよね……………わがまますぎるよね……………こんな、わたしなんか」

「えっ……………?」

二人の天使にとつて、それは意外な言葉だった。

彼女が我が儘、だって? 夢を永遠に奪われた哀れな少女を、誰が我が儘等と非難すると言うのか?

困惑する奈尾とさやかに向かって、ヤマネが続けて言う。

「みんなといっしょに戦うようになるまでは気がつかなかったけどさ、魔法少女になることを選んだ子たちって、おうちの問題とか、その子じやなきや想像もつかないような、つらいできごとを経験してる子が多いんだよね。さっきのわたしのなかまにもそんな子がいた。わたしね、そんなことぜんぜん知らずに、わたしの夢のことをその子に話しちゃったことがあったの。」

そしたらその子、言つてたんだ。ヤマネ、あんたいままでしあわせに生きて来たんだねって。あたしは自分が将来なりたかったものことなんかとうにわすれて、いまでは……」

今では、と言つた所で、ヤマネはまた何度かしゃくり上げ、それから大きく息を吸つて吐いてから言つた。

「……いまでは、ただいまっていうひとがいて、いっしょにごはんを食べる家族がいて、ふつうにの生活にもどるのが、あたしの夢、だつて……！」

思ひの丈を吐き出したら、今度は涙ばかりがいやにぼたぼたと溢れ出て来る。そんな自分が益々嫌いになつて行く。

「わかつてるの、わたし、それまでなに不自由なくのんきにくらしてきたくせに、叶うかもわからない、自分だけのくだらない夢なんかのために、おあそびみたいに契約して、それなのにこんなわたしなんかをチームに入れてくれたみんなに、なんにも返してこれなかった……だからきつと、そのことで、ばちがあたつちやつたんだ……！」

そんな風に意外な程すらすらと自分の駄目さ加減を、自身の罪状を述べて行く中でも、自分自身の言葉が、心が、どんどん嘘臭く思えて来る。

本当は、わたしはわたしが可愛いだけなのでは無いか。悲しんでいる様なポーズだけ見せつけて、慰めの言葉を貰いたいのが為だけにこうして泣いているのでは無いか。所詮

わたしなんか、<sup>最期</sup>最後まで自分の事しか考えられない、只我が儘なだけの女の子なのでは無いか。そんな想いで胸が一杯になって、苦しくてやりきれなくなる。

きつと、そんな事は全然無いだろうなあ、と奈尾は想った。ヤマネさんが仲間の皆さんを思う気持ちも、勿論ヤマネさんの自分の夢に対する真摯さも、きつと本物だった筈だ。見た訳じゃ無いが、あの言い振りなら絶対そうに違いない。

噂によく聞く、人生や自分自身を掛けても良いとさえ思える様な、誰かの夢。まだ幼く、毎日を生きて行くだけで精一杯の自分には、そんな夢破れた人間の哀しみを完全に理解する事は出来ない。それでも、だとしても。

「ヤマネさん、泣かないで下さい」

俯いていたヤマネが、ぐしゃぐしゃの顔をゆつくりと上げた。しゃくり上げが再発し、上手く喋る事が出来ない様子だ。

ヤマネにきつぱりと告げた奈尾が、そこに立っている。

「うう……………うえ……………」

「ご自分の大切な夢を、『叶うかも分からない』とか『下らない』なんて、簡単に言わないで下さい。結果的にはまあ、駄目になっちゃいましたけど、ヤマネさんが今よりずっと小さい頃から、例え虫と触れ合うのが怖くなっても、同じ夢を心の中で守り続けたつて言う、『事実』は永遠に消えないじゃないですか。人間が想った事には、意味のない事

なんて無いんです。大きな力があるんです。魔獣だって、人間の感情エネルギーを狙う位ですしね。

あと、自分より不幸な境遇にいる人達と自分を比べない。魔法少女になる人達は、みんなそれぞれ本人なりに真剣に悩んでその道を選んでいるんですから、願いに程度の差なんて別に無いんですよ。どんな人にも自分にしか分からない様な悩み事があるし、どん底に居る様に見える人って、意外と開き直って明るいもんなんですよ。

あと、導かれることを、『バチが当たった』なんて言わないで貰えますか。何だか、こっちが悪い事してる気分になるじゃないですか」

奈尾の言葉を受け、ヤマネは暫くぼうっとしていたが、やがてふふふと笑って口を開いた。

「うん、ありがとう。ごめんね」

やがて呼吸が落ち着いてきたので、袖で涙を拭う。ありきたりな言葉の羅列だったが、夢の事をはっきり「下らなくない」と言われて、大分気が楽になった。勝手に一人で変な事を考えて、暗くなるのはやめようと思えた。

或いは、奈尾には元々そう言う才能があるのだろうか？

☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆

森の中をひとしきり巡って、その後はずーっと、切り株に腰掛けて野鳥の声を聴いて

いた。

川の中を覗いてオパールの様な色をしたヤマメも見たし、よく熟れたアンズの実が木になっているのも見た。

「良いんですか？じやあちよつと失礼して」

ヤマネとさやかは霊の状態なのでもう物は食べられなかったが、奈尾はそう言つて急に実体化すると、普通に実を木からもいで食べていた。言葉知らずのヤマネには他に良い表現が見つからなかったが、事実そうだったのだ。

果実にかぶりつくと、ジュルツと果汁が口の中に広がる音がした。

「奈尾ちゃんときやかちゃんつて、ひよつとしてむかし消えた魔法少女なの？『円環の理』が来るとき、いままで導かれたおんなのこたちもいつしよに来るつて、聞いたことあるんだけど」

「さやかちゃんはそんなんれすけど、私はまら導かれた訳じゃ無いれすね、もぐもぐ。私は自分の魔法少女としての能力れ現実の世界にも霊の世界にも干渉れきるんすよもぐもぐ」

「コラ、奈尾。口に物入れたまま喋らない」

「すいませえん」

奈尾が頭を掻いて謝る。彼女等の様子を見て、ヤマネはまだ自分が生きていた頃にあ

る日学校に行くバスに乗った時の事を思い出した。その時の運転手さんはいつものおじさんでは無く、見た事の無い若い人で、いつもバスを運転している運転手さんは今日の運転手さんの後ろに怖い顔で突っ立って一挙手一投足を見つめていた。

若い運転手さんの胸をよく見ると、「研修中」と書かれたバッジが付いていた。奈尾もまた「研修中」なのだろうか。

「本当に良い所ですね、この山。空気が綺麗で、なんか嫌な事とか、全部どこでも良くなつて来ちゃうなあ。」

「プライベートでまた来たいなあ」

「ふふ、そうしなさいそうしなさい。一度きりの人生なんだから、やりたい事は出来る内にどんどん楽しまなきゃ損損。死んでから後悔したって遅いよ」

天使様お二人はすっかりこの小さな山をお気に召したご様子である。しかし、山を歩きたいと言った当のヤマネは、まだ何か浮かぬ顔をしている。

「大丈夫ですって、ヤマネさん。ヤマネさんがいなくなつた後もこの山だけは何百年も残って行きます。そして、山が大好きな人達の住んでる町は、ヤマネさんのお仲間がきつちり守ってくれますよ」

しかしヤマネは、自嘲するようにその言葉に応えるのだった。

「……………ううん、ちがうよ。わたしね、この世を離れる前に、山にせいっぱいのお礼

を言いたかったんだ。

ずっとわたしを見守ってきてくれた山といっしょなら、わたしはきつと、死ぬのもしゃくはないから」

えっ、と二人の口から声が漏れる。

「ヤマネさん……何言ってるんですか……?」

「山と一緒にならって……一体どういう意味よ……!」

「この山ね……もうすぐ、切り崩されちゃうの」

## 6 ロストホープ

「ええっ!!!!」

奈尾とぎやかかの二人が驚く声がハモった。

「え?え?ごめんなさい、ちよつと言ってる意味が分かんないんですけど、その、切り崩されるってのは……」

「おっきな団地がたつんだって……この町の、都市開発の一環として……」

がつくりとうなだれたまま、ヤマネがさらさらと言う。まるで何でも無い事みたいに……

「そんな……無くなるって言うの?この森が?自然が?……」

さやかかが改めて辺りを見回す。

さえずる小鳥、騒ぐ蝉の声。森はただ静かに、三人のヒトならざる少女を見守っていた。

「ここは、あんたや沢山の人にとって……思い出の沢山詰まった、大切な場所の筈なのに……」

「いやつ、私、虫の事は知りませんが、この山は自然が沢山残ってて良い所だと思いま

したよ。今時中々無いですよこんな空気が綺麗な森。勿体無いですよ！」

奈尾があまりのシヨックに軽くパニックつた。この森の事を良い所だと褒めたのは決してお世辞などでは無かったのだ。

「ありがとう……………でも、たぶんこればかりはどうしようもないことだから。もういいよ、わたしの中でちゃんとあきらめついたよ。最後の最期に山とのお別れにつきあつてくれてありがとう。……………とつても、楽しかった」

顔を上げてそう呟いたヤマネの目は、しかしすっかり生気を失い、何もかも全てが枯れ果てた様に昏い光が灯っていた。

その時、ヤマネは奈尾ときやかが目をまん丸に見開いて自身を凝視していることに気付く。

同時に、何処からか何かの燃えさしの様な匂いが漂つて来た気がした。

瞬時に、思い出す。何時かの蒸し暑い日、仲間達に誘われて夏の夜に手持ち花火や線香花火で遊んだ事を。あの日の燃え尽きた花火の匂いが、はつきりと鼻腔に感じられた。

「……………?」

真つ黒な細い煙が、幾筋か、幾筋も、何処からか、何処からとも無く、立ち上つて来ていた。何処から?

「ねえ……奈尾ちゃんさやかちゃん……これ、なんなんだろう」

「あー……やっぱいなこれは」

「ヤマネ……っ……っ……」

タールと同じ漆黒の細長い煙が、ヤマネの服の隙間からユラユラと大量に発生していた。

ヤマネが喋ろうとして口を開くと、口からももわつと、一気に煙が出て来る。

「なに……？？なんなの……っ！」

呼吸を荒くすれば、煙の量ももつと増える。更には目からも涙が滲み出す様に煙が染み出し始めた。

「どうなってるの……っ！！……わたし……えっ、なにになっちゃうの……っ！！」

奈尾ちゃん……奈尾ちゃん……っ！！」

## 7 セワスイー部長

朝。カンカン照りの朝、蒸し暑い朝、気合いの朝、汗水垂らして労働の喜びを感じるには、うってつけの朝。

野乃中市から電車で十五分、バスなら三十分程の戸平駅とひらえきの前に立地する木羅建設きらの朝は早い。中でも現在野乃中山を中心とした大規模な都市開発計画を進行中の特別企画開発部の部室の中では、一人の社員が、まだ他の同僚が来ていない内から何やらパソコンに忙しく打ち込んだり、取引先に提示する素材の資料を整理したりしていた。

「まだ他の社員の方もいらして無いのに、こんな早い時間からお仕事ですか。大変ですね、部長さんは」

パソコンをカタカタと打っている時、背後から聞こえたその声を「聴き慣れない声だな」と部長は思い、「後ろを振り返ろう」と思ったが、スピードに乗って忙しく稼働していた彼の十本の指はその動きが止まるまで十数秒を要した為、ようやく作業を中断して後ろを向くと、そこには見知らぬ少女が立っていたので、彼は驚いた。

黒地に金の装飾の入った、郵便局員かホテルマンの様な衣装。見た所歳は13、4と言った所か。彼の一人娘の一つか二つ年下位くだらだ。

関係者以外立ち入り禁止の社内に見かけない子がいる。それはある意味非常事態ではあったが、特別企画開発部の長たる彼はパソコンの画面に目を戻し、極めて冷静に対応した。いや、単に仕事の事で頭が一杯なだけかも知れないが。

「君は……？何処から入ったのかな。此処は関係の無い子供が入って来る所じゃ無いんだがね」

「娘さんはお元気ですか？」

忙しく働いていた部長の手が止まった。

「……何？」

「最近、娘さんとちゃんと話してますか？娘さん、まだ家に帰ってないんですよ。知ってますか？忙しくお仕事してる場合じゃ無いんじゃないですか？」

ええい、気を散らすな、と彼は自分自身の心に言い聞かせた。どうせ守衛の目を盗んで近所の子供が忍び込んで来たか何かしただけだ。適当に追い返すんだ。一日も早く計画を進めなければ。

「……君は何だ、娘の友達か？娘の事なら心配は無い。今頃はこの辺りの学校は何処も夏休みだからな。あの子の事だから早起きしてカブトムシの罫の様子でも見に行っているんだろう」

娘が三度の飯より昆虫が大好物である事は、彼の樂觀視出来ない悩みの種の一つで

あった。好きな物があるのは親としては喜ばしいのだが、何時までもあのままでは将来嫁の行き先があるかどうか。親馬鹿と言わば言え。

「ふうん、娘さんの事は何でも分かっているって訳ですか。良いなあ、美しいなあ。本当に血で繋がった家族は。」

あれれ、でも、だったらおかしいなあ。娘さんの事が大事なら、何であの人の思い出の場所を壊しちゃう様な事するんですか？」

ふーっ、と溜め息をつく。すべて理解出来た。そう言う事か、情に訴える作戦と言う訳か。何時までも諦めず、よくもまあ此処までの事をやる物だ。負けまずよ、貴方達には。

「……………これは失礼。ご町内の開発反対派の方の誰かに言われて来たのかな？ 君は。全く、我々も皆さんの為を思ってやっているつもりなのだが、住民の方々に中々理解を得られなくて悲しい物だ。兎に角そう言う事なら彼等に君から伝えて欲しい。あの山にこだわるのは分かったが、部長である私の家庭の事まで調べて持ち出すのは卑怯だし、不快だ、そっちがそう言う手に出るならこちらとしては迷惑行為として訴える事も辞さない、とね」

「さつきからさつきと大事な話を終わらせようとしてんじやねえよ。下手に出てりやあーだうーだ指図しやがって。大人だからつつつて調子乗ってつと潰すぞ、このオツサ  
ン」

「はっ……………!!」

思わず言葉を失った。

さつきまで小さな女の子を適当になだめすかして家に帰すつもりだった部長は、さつきまでは確かに丁寧な口調だった目の前の人懐っこそうな可愛らしい少女が、いきなり今の様な暴言を吐くと言う突然の事態に、柄にも無くたじろいだ。これか、これが今時の女子の本性なのか。悪意溢れるネット社会を生きる現代の少女達は、一皮? けば皆こうなるのか。こんな社会を可愛い娘は生きているのか。

女の子は暫くそのまま気迫を放ち続けていたが、やがて元の親しみ易さに満ちた笑顔に戻ると、

「……………なーんて。冗談ですよ、冗談。ほら、そんな硬い顔しないで。只の子供の戯言なんですから、もつと気を楽しにして、はははって笑ってください、はははって。ははははは」

「は、はは……………」

いや、悪いがもう、今はその優しい言葉さえも、警察の取り調べかヤクザの物言いに

しか聞こえなかった。

そして、えへん、えへんと甲高い声で二度程咳払いをすると、少女は本題に入り始めた。

「さて、冗談はこの位にしておいて……先ず何か誤解があるみたいなんですけど、私は別に開発反対派の使いじやありません。もつとと言うと開発が行われる予定の、胡筑町の人間でもない。ま、出来れば開発はやめて欲しいのはそうなんですけど、それはまた別の話」

「何だつて?」

彼は面食らった。何処からとも無く侵入して来たり、大人相手に堂々と啖呵を切った。この子は何なのだ?

と、彼女が唐突に、ぐいっと顔を部長の顔に近づけて来た。少し金色のそれは、自身の内側まで、潜り込んで抉り出すかの様な瞳だった。

「訳があつて詳しい事情は話せませんが、兎に角一刻を争う事態でして。私と一緒に来て頂きますよね、あつみとしろう渥美俊郎さん」

## 8 負の自然なガール

「……………奈尾ちゃんは何処に行つたの？」

ヤマネが、向こうを向いたままこつちを見ないさやかに訊く。地面にそのまま寝転がり、朝露に濡れた緑の草を、触れた所から真つ黒に穢しながら。

ヤマネの身体の異変は、奈尾が行つてから益々悪化していた。黒煙は今や全身から発生しており、ヤマネの姿は、黒い澱みの中に沈んでいる様に見えた。

「……………これが限界までですんじやったらさ、わたし、どうなるの？」

さやかは何も言わない。ただ空気が重く、固くなるだけだ。

「そつか、なにかとつかえしのつかないことがおこるんだね？……………」

ギギツと、さやかが無力感に歯を食いしばる音が聴こえた。既にこの世に無い者にも人間臭い気持ちがあるなんて、考えてみれば可笑しな事である。

「べつにいいんだけどね、もうどうなつても…」

「もうそれ以上言うのはやめな」

短く言うさやか。しかし、ヤマネももう受け答えがおかしくなつて来ている。大人しめに見えて、実は結構感情表現が豊かな彼女だったが、今はもう声を荒げたりはせず、そ

れこそ自分の天命を悟った老人の如くテンションが沈んだまま安定していた。

ふふふと嗤<sup>わら</sup>つてヤマネが言う。

「奈尾ちゃんにだって、こればかりはどうにもできない。おとうさんの計画をを止めることなんてね」

☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆

「奈尾、今すぐその開発計画を請け負ってる会社に行つて来て。あたしはヤマネの傍についてるよ。もうこうなったら、何とかして山の開発を止めさせないと……………」

「はー…やっぱそうなっちゃいますかあ……………また無茶苦茶な……………」

目の前で相談している奈尾とさやかかの姿が、ずっと遠くのように現実味が無く感じられる。

熱射病に罹っているみたいに身体が熱くて頭が重く、呼吸も苦しくなり、ヤマネの気分は最悪だった。おまけにアタマの中では、ぐわんぐわんとさつきからずつと聴き知らぬ誰かの声が響いている。

もう良いんだよ、無理をしなくても。良い加減もう楽になっておしまいなさい。怖がる事など何にも無い。大丈夫だよ。あんよは上手、ここにおいでよ。“むこうがわ”にはここよりもずつと楽しい世界が待っている。

憎いんだろう？何もかも恨めしいんだろう？分かるよ、好きただけ暴れるよ。この瞬間までの短い人生の間に可哀想な目に遭って来た子は、好きな物を、好きなだけ、いかにようにでも呪って全然平気。神様のお創りになられた、この世界のルールでそうなっているのさ。悪い事は言わない、見せかけだけの良い子ちゃんなんかやめてしまいなさい。今時流行らない。さあ、解き放つてご覧新しいちか

「でも、ま、他に方法も思いつきませんしね。なる様にするしか無いでしょう。ちよつと手荒になるかも知れませんが……」

「おつ、流石切り替えが早いね。その意気だよ、奈尾」

ぶるぶると首を横に振って、意識を無理矢理現実に取り戻した。もう辺りの鳥の鳴き声さえ、はつきり聞き取るのが困難になっている。遠くの方で、奈尾とさやかはさつきと相談をまとめてしまっていた。

「……………ま、待って！」

ぐらつく頭を押さえながら、ヤマネが二人を呼び止める。ふらふらと足を進めはしたが、石に躓いて霊体の筈なのに倒れた身体を身体はとうに消えてる筈さやかに支えられない。

「ヤマネさん？」

「あの、ちがう、だめなの、たしかに山は大事だけど、開発はやめさせちやだめ、だめなの」

「ちよつとあんた何言ってるの？」

ああ、なんてにくたらしいだめなこのわたし、とヤマネは思った。こう言う大事な時に限って、言葉の一つもろくに発せない！

「……………ヤマネさん！ヤマネさん！ちよ、痛い痛い痛い！離してくださいって！！」

「……………山の開発計画を進めてる責任者が、わたしのおとうさんなんだよお！」

「……………つはあ！！」

はあ、はあと肩で大きく息をするヤマネ。

肝心な事を、ようやく口に出して伝える事が出来た。

「……でしよ、何でまたそんなややこしい……！」

「ヤマネのお父さん、この山が好きじゃないの？」

ヤマネは下を向きながら絞り出すように言う。

「……………そうすることがこの町の為になるって、おとうさん本気でおもってるみたい……………」

「だったら尚更お父さんを説得しないと」

「でも私、お父さんをこまらせるのもいやだ……………」

目に涙が溜まって来た。何故目に涙が溜まるんだ。本当の心の叫びが、涙と共に一気に溢れ出て来た。めそめそしちやって、同情が貰いたいだけなんだろう。こういう時泣く事しか出来ない自分が、わたしは本当に大っ嫌いだ。

「もうむりだよ……………この山が削られちゃうよお！わたし、ほんとに山がなくなるのもやだよおっ！！」

黒煙を身体から発しながら、子供の様に泣きじやくるヤマネの前に、奈尾は一度さやかと顔を見合わせて、そして声を掛けた。

「……………ヤマネさん？」

「う、うとうとう……………」

「ヤマネさん、私嬉しいです。ようやくご自分の本音、聞かせてくれましたね？」

ヤマネは顔を上げて奈尾を見た。ひまわりの笑顔。何でもどんくさいヤマネには、学校の友人には滅多に見せて貰えない、暖かい表情だった。

満面に笑う奈尾は、力強く言う。

「大丈夫です。ヤマネさんの問題は、全部私がどうにかします」

何言ってるの、この子。もう全部終わったんだよ。

「どうにもならないよ……おしまいだよ、もう……」

「じゃあ、どうにもならなきゃ、何とかすれば良いだけですよ」

え、とヤマネの口から言葉が漏れる。

「ヤマネさん、私はね、『無理だ』とか『駄目だ』とか、個人的にそうやって口で言うから、本当に何も出来なくなっちゃう物だと思っんです。

どうにもならないかどうか、やってみるまでは分からないじゃないですか。いや、必ず解決して見せます。ナビゲーターとしてのプライドに賭けてもね。

……だから、もうちよつとだけ、後ほんの少しだけ頑張つて下さいね。私はすぐ戻つて来るので」

その後奈尾は、「じゃあ、行ってきます。さやかさんお願いしますね」と短く言い、ぼうつとしてゐるヤマネを置いて去って行った。

☆☆☆☆

「……って、なんだかえらくはりきって行っちゃったねえ、奈尾ちゃん……」

「当り前だよ。あの子にとってナビゲーターは、大切な自分だけの仕事なんだから」

「仕事だからやさしいんだ。仕事だったから、奈尾ちゃんはわたしに笑いかけてくれたんだ。やっぱりね、ふふふ。そんな気はしてたんだ……」

「良い加減にして」

さやかが静かに、しかしぴしやつと言葉を叩き付けた。そんな彼女の様子を見て、マネは今度は可笑しくて堪らないと言った様にふふふと笑い続けた。

「ごめんねえ、わたし頭がわるいからさあ。ひとにめいわくはかけるけど、わたしはこれでふつうのつもりなんだ。」

あのみさ……もういいよ。なんかわたし、もうなにもかもどうでもよくなっちゃったからさ。わたしなんかのために、ふたりにぼっかりがんばらせるだけわるいよ。

……もうだれも、わたしのせいでやな顔しないでよ。

どうせもう、何をしたらってやるだけむだなんだからさ。べつにいいよ、もう」

「やめなよ……やめな……」

「それともなんなの？わたし、もう死んじやったのに、わたしのすきにさせてくれないの？べつにどうなっちゃってもかまわないんだってもうこの世のことなんか。野乃中山がなくなるんなら、もうこたわるのもばかみたいだしなあ。ねえ？」

なんだかなあ、どうしていままでわたしが守ってきた町のひとたちが、わたしのおとうさんが、大すきな山を消そうとするのかなあ？どうしようかな、いつその町にこのまま残って、だれもかれも呪ってやろうかなあ！」

「やめなつて言ってるだろっ!!」

今までぐつと堪えてはいたが、とうとうさやかはヤマネの胸倉を引つ掴んで無理矢理に立たせた。

「……ひねくれた事ばっか言つて、悲劇のヒロインにでもなつたつもりかよ」

「……………」

「辛いのはあんた一人だけだと思つてるでしょう。冗談じゃないつての……………」

……………必死になつて頑張つてるあの子を、何で信じてあげられないのさ!」

その言葉にはつ、となつて、ヤマネは思い出した。立ち去る直前、奈尾が小さな声で「…………ハッスル、ハッスル……!」と自分に言い聞かせているのがちらりと見えてしまった事を。

「大切な自分だけの仕事つて言つたよね。初対面の赤の他人の問題を、自分の事みたい  
に親身になつて、気持ち深く理解して、一緒に悩んで解決する……………誰

でもやっている様で、中々誰にでも出来るもんじゃないよ。

奈尾あの子もそれは分かっている。そして、あの子はそれが出来る事を自分の誇りにしてるんだ。

『仕事』って、そう言うもんよ。そこには必ず当人のプライドがあるの」  
そこまで言うのと、さやかは不意にヤマネの事を離し、空を見た。

何があるのかと思ひ、ヤマネも空を見上げる。

真昼の空に出ていた満月を見て、ヤマネは思わず目をそらしてしまった。

透き通った満月が、何故だか骸骨がいこつの目の穴を連想させたからだ。

「……ごめん、ほんとはあたしにもあんたの気持ち分かるわ……あるよね。魔法少女やっているとさ。自分が何の為に頑張っているのか分からなくなる時が。

だから、あんたにも後悔して欲しくない訳よ。

お願い。奈尾や町の人たちに気持ちをぶつける前に、もう少しだけ、落ち着いて考えてみてくれないかな？ その呪いを言う前に、もう少しだけ猶予をくれないかな？」

「……さやかちゃんは、あったの？ 自分をおもってくれてたひとに、ひどいこといって、後悔したこと」

「何度もあるね。だからこういう風に生意気な口きけるの。あんたより年下の癖にね。

……  
……噂をすれば、帰って来たみたいよ」

さやかに言われ、ヤマネは後ろを振り返った。

背広の男性と、制服の少女が、並んで森の中を歩いているのが見えた。

## 9 木(ボク)の鼓動(rhythm)を聴いてくれ

真夏の空では相変わらず、ぎんぎら太陽が独りぼっちで市民権を主張し続けているに  
も関わらず、森の中は涼しかった。

ただ、それでも日頃運動不足の木羅建設特別企画開発部長は、額に発生し続ける玉の  
汗を繰り返しタオルで拭っている。

哀れなり渥美俊郎氏、結局突然現れた小さな女の子の迫力に負け、彼の人生の全てた  
る仕事部屋から引っぱり出されたのだった。

「今更山に連れて来た所で、我々の計画は変わらんよ。

私を心変わりさせるつもりかね」

台詞だけ描けば立派に見えるが、実際にはハーハー息切れしながら言っているので情  
けない事この上ない。精も根も尽き果てかけた彼を振り向き、芽育奈尾は無邪気に笑  
う。

「そんなんじゃないですつてえ。お父さんお仕事でお疲れでしょ？要するに気分転換み  
たいなもんですよ。

一緒にお散歩しましよ、おさんぽ」

俊郎氏ははあ、と軽くため息をついた。今時の子供にしてはえらく元気だ。第一、制服で汗もかいてないのか？

開発はいけないと言うが、無論我が社だって、その辺りについても充分に注意は払っている。どうして反対派の皆さんにはその事が伝わらないのか。

ここまで来て、俊郎氏はまだ奈尾の事を開発反対派の手先だと思っていた。最も、彼の持つ凝り固まった大人の脳味噌には、魔法少女がどうしたと言う様な奇抜な発想をする事は到底無理だし、わけがわからなかったのである。

やっぱり脚が速いなこの子は、と思う。運動不足のオッサンには、ついに行くだけで重労働だった。

と、急に奈尾が足を止めた。

「……………どうしたんだい？……………急に……………」

「開発したら、この辺の木って、全部伐られちゃうんですよね」

何処か遠くを見ながら言われた。はあ、ともう一つため息。ついでにそこの切り株に腰を下ろして一息。澄み切った空気で肺を満たして、呼吸を整えさせて貰う事にする。

「それについてはもう説明がされてる筈だがね…一旦伐採して、団地に問題が無い様な配置で植え直すんだよ。山の自然や景観を壊さない様、環境の変化に強くて成長も早い

木を、新たに…」

「紙の原料とかになる木ですよね？リスとか、山の動物達の餌になる実がならない種類の。ヤマネさんから聞きました」

出かけていた言葉が喉の奥に引っ込んでしまった。良い加減な対応は出来ない、と嫌でも思い知らされる。この子は一体、どんな人物なのだろう。

大人とか、子供とか、そう言った概念を超越した、超自然の存在の如く、奈尾は言葉を連ねる。

「他にも、色んなお話を聞かせてくれましたよ…ヤマネさん、説明するの上手ですね。

この山の歴史とか………」

野乃中山。人々の温かい親しみと共にある大自然。

かつてここは、一度完全に死にかけてた事があった。

昔、外国産の木材が町に運び込まれた時に、外来種の寄生虫がこの山に入り込んだ。

原産地とは何もかもが異なる環境で、寄生虫が日本での宿主に選んだのはカミキリムシの一種。

カミキリムシが木を齧る事で寄生虫を媒介し、真つ直ぐに立っていた木が、次々と立ったまま枯れて行った。

自然破壊は連鎖する物。木が無くなった事で、葉を餌にしていた昆虫や、実を食べる

動物達、更に木漏れ日が無くなって背の低い植物が直接強い日光を受け、地球の創り出した芸術は次々と消滅して行つた。

カミキリムシや、海外からいきなり連れて来られた寄生虫は、決して悪ではない。でも、意図せず外来種を日本に持ち込んでしまった人間も、悪者とは思いたくない。

この世界には、本当の意味での「悪者」なんて、きつと居ないんだ。

少女らしい、それがヤマネの、純粹な『願ひ』だった。

「——それで、そこから何年もかけて木を植林したんですよね。自然豊かだった頃の山に出来るだけ近い環境になる様に、出来るだけ沢山の種類の木を……………勿論、それだけで解決は出来なくて、間伐したりとか、人の手でちよこちよこお手伝いして、それでようやく今に至るとか……………ヤマネさんはこの事を図書館の本で読んで知つたそうです。」

……………ねえ、お父さん。ヤマネさんの意思も尊重してあげませんか？」

「……………どうしろと言うんだ？そもそも、開発をしなくとも、この町そのものが、もともと自然があつた所を切り拓いて造つた物だ。それも全部壊して、元に戻せとでも言うのか？」

この町は、昔から自然を大事にし過ぎて来たのさ。建築資材として、観光資源として、利用できる所は沢山ある。私はそうしたモノ達を使えばこの町をもつと発展させて行

く事が出来ると考えている。私もここが大好きだからね。

そうなれば、どうなる？必然的に人の住む町は発展し、完全な自然のスペースは少しずつ減少して行くだろう。

人間は最早自然を少しずつ削り取りながらでなければ生きられない様になっているのさ。それが現代人の性さがなんだ。

我々はどうすれば自然と言う資源を少しでも長く使えるかを考えるべきなんだよ」

「森だつて、河だつて、そこに暮らす生き物だつて、みんな生きてる、生命いのちじゃないですか。

人間は自然に一切触れるな、なんて誰も言っていないです。生きて行く上で、本当の本当に最低限必要な範囲でなら、自然は人間に何かを取られても、また生み出す事が出来る………

ヤマネさん言っていました。自然と人間が無理なく、お互いに奪い過ぎないで、一緒に寄り添う様に生きて行く世界。

取り敢えず自分の今の目標は昆虫学者だけ……

何時か自分が大人になった時、そんな世界を見てみたい、叶えたい………」

下らん、子供のたわ言だ。俊郎氏は思った。それが簡単に出来れば苦労は無いと。

「あの子はまだ子供だ！所詮そんなのはただの夢だ!!」

「夢……つて、そもそも何なんですかね」それでも黄<sup>き</sup>金色の瞳が振り返り、その「大人の正論」を真っ向から睨みつけた。

「もしも空を自由に飛べたら、難病で苦しんでいる人達が助かりますように……そんな子供が口にする様な願いが現実になって、これまで世界は変わって来たんじゃないですか？」

## 10 あばよ幽鬼（ユウキ）、宜しくナミダ

「うええええええ……」

「ほら、もう泣かないで」

年下の子の前で、涙は見せないようにしてただけだな。年下の子にすがりついて泣くなんて、たぶんはじめてだとおもう。

ヤマネの両眼からは、濃い血の様な黒い涙が後から後から流れ続けていた。だけど、その黒さの性質は、恐らくはさつきまでとは違っていて。排出された凝縮された体の中の悪い物は、光に変わって蒸発し、清らかな大気の中に溶けて行った。

さやかに抱き付いて泣きじやくるヤマネを見ながら、切り株に腰掛けた奈尾が、すっかりくたびれた様子で呟く。

「いやー、何とか上手く行つて良かったですよ。ヤマネさんのお話聞いて冷静に考えたら分かるんですけど、あの計画って、山の自然の事考えたら、結構無理のある部分が多いんですよ。お父さんも町の発展って言うよりも、どつちかって言ったら会社への恩を返す為に張り切り過ぎちゃったって感じが強いみたいでしたし。自分が言い出した手前取り消しにくかったって言うのもあるんでしょうけど」

「ヤマネのお父さんの中に真まことに町を思いやる心があつて本当に良かったね。まあ若干悪い事した感かんは否いなめないけど」

「それ言いつちやいますかー。しようがないじゃないですかこつちもそう言う仕事しごとなんだから」

「あはは、うそうそ。初仕事はつしごとにしちや上出来うまだつたと思うよ、奈尾」

「……………えつ？初めて、だつたの？」

泣き腫はらしたヤマネがさやかさやかの胸から顔を上げる。その体からだ全体ぜんたいはもうすっかりキラキラした光ひかりに包つつまれていた。

「ヤマネさんを不安ふあんがらせない様ようにと思おもつて、極力ごくりき悟さとられない様ようにはしてたんですけど……………」

「ばつが悪わるげに頭あたまを搔かく奈尾なゐ。と思おもつたら、今度はいきなりヤマネに向むかつて頭あたまを下くだげた。」

「えつ？えつ？どうしたの？」

「未熟者みじくしやの言いい訳わけではありますありますが、私わたしはナビゲーターとして、仕事の間は対象者たうさうしやの方かたには変かはに緊張きんじやうせず、自然体しぜんたいでいられ、そして最終さいしゆう的には満足まんぞくして頂く事ことこそが第一だいいちだと考え、そして心がけておりました。ですがその結果けつこ、仕事しごと中の私の言動ごんどうを不快ふくがいに思おもわれたのなら……………お詫わがび致します」

さつきまでラフな感じだったのが、急に酷く真面目に謝罪されたものだから、ヤマネも面食らっってしまう。

「あつ、あ、えと、いやいやいや、べつにそんな、気にしてないからだいじょうぶだよ？ うん、わたし、奈尾ちゃんときやかちちゃんと山を歩いてるとき、すつごい気さくに話しかけてくれて、すつごいたのしかった。…これからもこんなかんじでいいとおもうよ。この山のこと、おとうさんのこと……わたし、すつごいすつきりした。ありがとね奈尾ちゃんさやかちちゃん………こんないい終わりかた、わたしなんかにもつたいない……」

そこまで言ったら、また泣き始めてしまった。

「あーあーほら、もう泣くなつて。円環あっちに逝あっちつたらもう、すぐ『わたしなんか』とか言ったりしない様にしなよ？」

「うんがんばる………」

さやかに言われて、ようやくヤマネは泣き止む。奈尾はあつという間に夕焼けになっってしまった空を眺めながら、木々の間を風が通り抜ける音に耳を澄ましていた。

「良い音するんだなあ………そう言えばヤマネさんの名前つて、漢字だと『山』の『音』つて書くんですね」

「おとうさんやおかあさんも、こどものころはこの山であそんで、山に親しんで育つてき



ろう。よく聞けば、鼻と口から別々の音を同時に出してゐる事が分かる筈だ。

主からの合図を受け、楽団はゆっくりと準備を始める。

やがてさやかかが指揮棒の様に楽団に向かつて短剣を振り、演奏が始まると、五線譜の様な天まで続く階段がかけられた。

このまま真つ直ぐ登つて逝けば良いんだよ、と声を掛けられる。

ヤマネ  
山音と奈尾は階段に足をかけた。

「人間と自然が一緒に生きられる世界。何時か実現したら良いですよね。私もそう思いますもん」

「マジシャンみたいな子がいたでしょ?」

「ルルさん、でしたっけ?」

「ちよつとすなおじやないとこはあるけど、あの子も自然や、草花がだいすきな。よくそういうことでいっしょにおはなししてたからさ。わたしのぶんまで、あの子が夢をかなくてくれたらいいな」

「そうですね。それが一番良いと思います」

風の音に耳を澄ませるなら、ルルや俊郎の前には一頭の蝶が現れて、やがて空の彼方までひらひらと飛んで行くだろう。

この日、一人の少女が消えた。

未来の希望と共に。

？  
個人情報に付き持出厳禁

ノルマ達成

名前：渥美山音あつみやまね

年齢：15

出生地：野乃中市 あかやまく 朱山区 こつぎちやう 胡築町

誕生日：8 / 11

血液型？ B

好きな物事、趣味：蜂蜜、蜂の子、イナゴの佃煮、西瓜。山の中を歩く事。誰かとお茶を飲みながらお話する事。そして勿論虫取り、昆虫採集。

嫌い・苦手な物事：タコ、イカ、クラゲ。声が大きな人。お化けやそれが登場する話。大型犬。水。

口癖：「わたしなんか」

特技：作文。

ソウルジェムについて：ドリームキャッチャーと呼ばれるお守りの中央に付いている石がそれ。エメラルドの様な緑色。ネックレスとして首から提さげている。

武器：仙人が使う様な杖。先端に光球を発生させ、ハンマー投げの要領でグルグル振り回して遠心力で飛ばす。威力が高い代わり、真っ直ぐ飛ばずに誤爆する恐れあり。

契約時の願い：「もう一度虫に触さわれる様になりたい」。過去のトラウマから、虫が好き

でありながら触れなくなってしまうた為。

固有魔法：「自然との対話」。風や野生の動物等を味方に付ける事が出来る。

生まれながらにしてのドジっ子で、幼少の頃から親や先生に沢山怒られ続けていた為、おどおどとして発言が苦手な、徹底的に自分に自信の無い性格になってしまった。白くて綺麗な肌の、十人が十人「美少女だ」と言う様な外見をしているが、自信の無さ故、自分を不細工だと思い込んでいる。

ただし虫に関する事になると性格が変わり、打って変わって饒舌となる。この手の人間にありがちな、自分がその時考えている事だけを相手の反応を見ずにまくし立てるタイプでは無く、虫に関する説明も上手。

一緒に居ると何か気持ちいが和む、癒し系。

担当：奈尾

## 第2話 芽育奈尾、13、風見野市

### 1 希望の都市

自分だけは泣かせるな

とんちで有名な禅僧いっきゅうそうじゆん一休宗純には、こんな逸話があるらしい。

ある年のお正月。人々が新年ムードで騒いだり遊んだりしている中を、一休さんは誰の物かも分からない、行き倒れになった人間の髑髏どくろを杖の先に引っ掛けて、人々に見せつけて回った。

「ご用心ご用心。ご用心ご用心」

勿論もちろん、この奇行には彼なりのメッセージがあつて、この時代の年齢の数え方は「数え年」と言い、人は生まれた瞬間にまず「1歳」になり、そこから先は誕生日が何時いつだろうと、正月に一齐に歳を取っていた。

「二つ年を取ると言う事は、また少し人生の終わりに近付くと言う事。どんなに贅沢をして着飾っていても、人はみな何時かはこの様になるのだ。

一度この世に生を受けた以上、死から逃れる事が出来ぬは人の運命さだめ。その節目の度に騒ぐとは、何とまあ滑稽な事よ。ワツハツハツハ」

『門松は 冥途の旅の 一里塚 めでたくもあり めでたくもなし』

いや、最初のと最後の狂歌きょうかの間の台詞には私の演出がほんのちよつと入っているが、要するに現代人に分かり易く言うのと大体そんな感じだつて話である。

一休さんが禅僧として生きていた頃は、丁度応仁の乱の時期で、飢饉が流行していたり、一揆が起こったり、人の生命いのちが今よりもずっと不安定な時代だった。そんな世界だったからこそ、何気無い日常のすぐ傍そばにある『死』から目を背けて欲しくなかったのだと（例え人々から心ない誤解を受けても）、私はそう思う。

今の日本はかの時代よりもずっと人の生命は安全に守られているが、それでも根本的な部分は同じだ。

一度生命としてこの世に生まれ落ちたら、それが永遠に続く事は有り得ない。

誰もが何時かは死ぬ運命。だからこそ、生命を守る為に戦っている人達は、何時の時代にも存在する。

私の二つの仕事は、そんな世の中の摂理と深く結び付いている。

初めまして、私の名前は芽育奈尾めぐみなお。

魔法少女であり、そして『円環の理』直属のソウルナビゲーター。

今回は、私とその道を歩む事になったいきさつを、皆様にご説明させて頂きたいと思  
います。

☆☆☆☆

ピカピカのビルが、樹木のように空に向かって背伸びしている街。

異国感漂うスタイリッシュなデザイン建築物の群れは、夕暮れから夜にかけて、遠くから見ると「黒い森」——魔法の巣窟を思わせる妖しいシルエツトを作り出す。

ビルの森は昼間でも爽やかな木漏れ日を生み出さない代わりに、人々の心の疲れが、澱みが、闇に集まってこびりついた様な閉鎖的な空間を演出する。

路地裏、と呼ばれる場所だ。

ピチョン、ピチョンと、何処からか水が漏れている音がする。

ヒュウツと吹き抜ける冷たい風の中に、私は一瞬だけじめじめした路地裏の匂いとは違う物が混じった事に気が付いた。

まるで背中に背負って運んでいるみたいに、巨大な月をバツクにその人は現れた。キリスト教の牧師の服に似た燃える様に真っ赤な服は、闇の中でもよく映えた。

一度も櫛くしを入れた事が無いんじゃないかと言う様な癖の強い髪には、大きなリボン。武装した騎士を鎧よろいごと串刺しにして殺しそうなでかい槍を片手に持って、闇の中で光りそうなライオンの眼でこつちを見ている。

もう片方の手に持った紙袋には、遠目にだがMisterと言う文字が書いてあるのが見て取れた。湯気の立っている揚げたてのドーナツを袋から出して齧かじる時、犬の牙み

たいな八重歯がちらちら見えた。

「こんばんはー」

と、私は愛想良く杏子さんに声を掛ける。杏子さんは仏頂面で私の傍を通り過ぎると、そこらにあつたゴミバケツをひっくり返してその上に腰掛けた。

「随分お早いお着きじゃねえか。奈尾」

「あれ、約束の時間ピッタリだと思つたんですけど」

「遅くに外出して、お前の家から何か言われなかつたのか、つて言つてんだ。マミの奴がこんな夜中に待ち合わせの約束しやがるから」

「学校の友達とご飯食べて帰る、つて言つてあるから大丈夫です。それに、夜中つて言う程遅くもないですつて」

「はっ、そうかよ。余計なお世話だったね」

「そんな事ないですよー。心配してくれてありがとうございます。」

ね、それ、良い匂いしますね」

ぐうぐつと、私の中の虫が良いタイミングで鳴いた。夜中に食べるお菓子が妙に美味しく感じるのつて、私だけではない筈だ。

杏子さんはまた何か言おうとしたが、上手く言葉にならずに飲み込んで、それからばつが悪そうに紙袋を一瞥して、もう一つのドーナツを取り出してこつちに差し出して来

た。

「……………食うかい？」

「やったあ！」

一口だけ齧って、食べる訳でも無くじつと眺める。こうして見ると、ドーナツは欠けた月みたいに見えた。

「ねー、ドーナツってお月様にちよつと似てますよね」

「ガキみてえな事言ってる暇があったらさつきと食べ」

杏子さんがこつちを見もしないで言う。何だい、少し位は良いじゃないか。

ドーナツの穴を通して、夜空を覗いてみる。さつきは大きく見えた月が、今はドーナツの穴に入る程小さく見える。また一つこの世の意外さを発見してしまった気分になった。

この世はきつと、沢山の意外性で溢れている。どんな不幸だって、ちよつとした気付きや発想の転換で何でもない物にしてしまう事が出来る。それがガキの私がガキなりに歩んで来た短い人生の中で導き出した答えだった。

「……………なあ奈尾。あんまり親は心配させんなよ。親は居る内うちが華なんだ。何時までも一緒には居られねえ」

……………なーんて考えていたら、夜空を眺めている内にしんみりした気持ちになってし

まったのか、横から杏子さんがらしくない事を言ってきた。いや、そんな事も無いか。私と同じ街で生まれた佐倉杏子さんは、悪ぶってはいるけど心の本当に奥の方には凄く熱い物を持っている。

「……心配してくれて、ありがとうございます」

私は同じ事をもう一度、今度ははっきりと伝えた。本当に、彼女と出会ってからのたった数ヶ月の間に、何度この心からの氣遣いを感じただろう。心配されるって、良いもんだ。

私がお礼を言うと、杏子さんはまた照れ臭そうに視線をそらして、

「……………畜生、ママは何やってんだ」

かわいいなあ。

十分後。

「ごめんなさい、お待たせしちゃったかしら？」

「ママさん、こんばんは」

「遅<sup>おそ</sup>え」

黄色いひらひらしたスカート、お上品なカールの髪。

よく見るとそのコスチュームは西洋の昔の兵士をモチーフにしている事が分かるのだが、それでもその全体像は、例えるなら道端に急にパツと綺麗な一輪の花が咲いた様な。

「てめえで時間決めという遅れて来るとかありえねーだろ」

「悪かったたら。本当に心から申し訳なく思ってるのよ？」

芽育さん、今更だけどこんな遅い時間に呼び出しちゃってごめんね？ご両親は、何か仰ってた？」

この中では一番お姉さんのママさんが、杏子さんから急に私に話を振って来た。どんな時でも余裕たっぷり、でも今はちよつと息が切れてて、そして心配そうな顔に向かつて、私は指でマルを作って「OK」のサインを作って見せる。

「いやあ、大丈夫ですよ。その辺は上手い事説明して来たので」

「そう、良かったわ」

ママさんの顔がふわつと、心底安心した表情になる。別にその位くどいで気を悪くしたりしないって。彼女は何時も自信に溢れている様に見えて、内心誰に対しても、おそろおそろ、だ。そのくせ誰に対しても友達になりたがっている。そして、そう言う繊細な所が魅力でもある。

少なくとも私は、面倒見が良くてよく相談に乗ってくれるママさんが大好きだ。

「魔法少女あたしの時間感覚で約束取り付けんよ。奈尾は今、大切な時なんだからさ。」

はしやぎ過ぎなんだよ新しく後輩が出来たからって」

確かに、今の時間に待ち合わせを指定された時にはちよつと驚いたけど。

「あら、佐倉さんは嬉しくないの」

「嬉しい事なんざ無いよ。また面倒見なきやいけないのが一人増えるんじゃないか」

「ふふ、素直じゃ無いわねえ」

「うるせえな。それよか遅れて来た事に対する納得の行く説明の一つでもねえのかよ」

「それは私を連れて来たからよ」

ママさんの背後、壁に寄り掛かった誰かが、急に言葉を発した。

華やかなママさんの服装とは対照的に、白、黒、灰の無彩色で構成された、学校の制服に似た尖った服を着て、表情は微かに愁いをたたえ。

サラッと綺麗な長い髪を掻き上げれば、片手の甲に付いた紫色のダイヤの紋章、そして赤いリボンに目が引かれる。

杏子さんがいかにもうんざりした顔をした。

「何もそいつまで連れて来るこたあねえだろうに」

「あら、どうして？ 暁美さんだって先輩になるのよ。」

これからお世話する身として芽育さんに挨拶位されなくちや」

「申し訳ありませんが、私はそう言う戯れ事に付き合う気は一切ありませんので」

大して面白くもなさそうな顔のほむらさんが、慇懃無礼な口調で吐き捨てた。杏子さんが海より深いため息をつく。

「もう、曉美さんたら。どうしてそう皮肉っぽいの」

「魔法少女は本来、一人ひとりがそれぞれ自身の為だけに生きる者よ。自分以外の同業者はイコールただのライバルにしかなり得ない。

どうでも良いけど杏子、貴女昔と比べて随分丸くなつたわよね」

こんな馴れ合いごっこに付き合つてあげるなんて、つて？ひえく。確かに今日のほむらさんは何時にも増して口が悪い。相当無理矢理に連れて来られたのかな。

うわあ、今度は杏子さんと睨み合いが始まった。マミさんが二人の間に仲裁に割つて入る。

「みんなお揃いの様だね」

杏子さん対ほむらさんで今にも活劇が始まるんじゃないかと私がドキドキしながら見守っていると、何処からとも無く甲高い声が響いて来た。

通路の真ん中、丁度月明かりが丸く当たる、数秒前まで何も無かつた所に、何時の間にかソレは座っている。

ウサギともネコともキツネともつかない白い小動物。形容し難い形の耳をして。

まん丸の眼は赤く………赤く。

ヒトの浮き世うきよをただ眺めている。

「キュウベえ」

杏子さんとママさんがハモって眩く。ほむらさんは黙って目をそらした。

「はっ、ほんとに全員揃ってから来やがった。何時も通り気持ちのわりいケダモノだよ」

小動物は杏子さんの悪態など気にも止めず、こちらにつかつかと歩み寄りつつ、口を動かさず、高い声で喋る。

「奈尾、魔法少女の契約を受け入れてくれて嬉しいよ。君には大いに頑張って欲しい」

「待って、キュウベえ。最後に私達でもう一度だけ芽育さんに確認したいの」

ママさんがキュウベえと呼ばれている、この生き物みたいな物を制止した。

キュウベえはちよつと首を傾げて、考える素振りを見せてから（と言っても、表情はお面みたいに変わらないままだけ）言った。

「そうだね。僕としても契約はフェアにやりたいしね」

「本当に、覚悟は良いのね」

「もう何度も言ったじゃないですか。私は、なるべくして魔法少女になるんです」

「あたしとママが、願いを叶えた結果どうなったかは話したな？ちゃんと、全部理解して

納得した上での決断だな？」

「間違い無いです」

「おい、お前からは何か無いのかよ」

「ご勝手に。私は私で好きにやらせて貰いますから」

ほむらさんはそう言うと、さつきと同じ様に壁にもたれ、我われ関かんせずと言う風にプレーヤーを出し、イヤホンを耳に入れて音楽を聴き始めた。杏子さんの舌打ちが響く。

「あら、その漏れてる音楽、名な乃のアラシの曲よね？ 曉美さんも好きなの？」

何か、マミさんがいきなり空気にそぐわない事言った。当然の様に無視するほむらさん。

曉美ほむらさん。この人だけはどうもまだよく分からない。

何年も生きている大人の様な落ち着いた顔をしているかと思えば、時には子供の様な無邪気な表情を（一瞬）見せる事もある。

と言うか、彼女はあまり積極的に他者に関わる事をしない。

それでも、マミさんの言う通り、必然的にこれからお世話になる事も多くなるんだろう。

そう思った私は、彼女に近付いた。

「……………何かしら」

私にじっと見上げられている事に気付いたほむらさんが、変わらない調子で言う。

「ほむらさん。私、これからほむらさんとも一杯お話したいです。ほむらさんにしか分らない事、沢山教えて貰いたいです。だから……宜しくお願いします！」

出来る限界で愛想よく、そしてはつきりと伝える。

ほむらさんは暫く私の目を見続けていたが、やがて急にそっぽを向いて言った。

「……………知らない、やるならさっさと済ませれば良い」

……………さいですか。

☆ ☆ ☆ ☆ ☆

「解き放つてご覧……君のソウルジエムは、どんな願いで輝くのかい？」

「私の願いは、あの時私を助けてくれた、あの人に……！」

## 2 ウェイスト・サイドストリー

芽育生頭奈は、ごく普通の女子高生だった。

退屈な日常に刺激を求め、好奇心旺盛。此処は自分の居るべき場所では無いと、何時も思っていた。顔の作りが綺麗な事から生頭奈に言い寄って来る男子は大勢居たが、彼女からしてみればそんな奴等は別世界の住人も同然、猿の惑星のチンパンジーの様な物だった。

その内、彼女は親に内緒で、出会い系サイトと言う物を始める事になる。

そこには彼女が今まで知らなかった世界が広がっていた。

出会った男性は、物腰が柔らかく、見た目もカッコ良くて、何より生頭奈にとっては未知の輝き、彼女が今まで知り得なかった「大人の世界」の香りを常に身体からさせていた。

彼は生頭奈を、今まで知らなかった色々な所に連れ出し、今まで見た事も無い様な素敵な服やアクセ、楽しい遊び、そしてお酒の味を教えてくれた。生頭奈に対して何時も優しく声をかけてくれ、猿の惑星での暮らして疲れた彼女の心を癒してくれた。彼と一緒に居る時間こそ生頭奈にとっては一番大切になり、他の事はどうでも良くなった。

彼女は恋に恋する乙女だった。もう、彼女は誰かに依存しなければ生きて行けなくなつてしまつていた。

☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆

素行がすっかり不良のそれになつた生頭奈は、何時もの様に友達と一緒に平日から遊び回り、オバケもとづくに布団に入つて寝ていると言う位の夜遅くに彼等と別れて、ぶらぶらと夜の街を見物して歩いていた。

何処のお店もやっていない。明かりが点いているのはコンビニやファミレス位の物。家に帰るつもりは無かつた。もう何日も家には帰つていなかった。マンガ喫茶か友達の家を探して、泊めて貰うだけだった。

その時、こんな夜遅くに大声でお喋りしながら歩いて来る者があつた。嫌な物を感じて、反射的に彼女は身を隠した。

「……最近のJKつてのは、親から一杯お小遣い貰つてるからさあ、意外と美味いんだよ。」

堅い事言うなつて。偶には良いじゃないの、仕事の息抜きに若い子と楽しい事したつて。

だからさあ、女つてのは人間扱いしちやいけないんだつて。犬か何かだと思つて躡けてやりやあ良いの。最悪顔殴るぞつて脅しやあどうにでもなるから。向こうもそれで

喜んでる訳だしね、馬鹿だから。

愛情だとか、そんなもんじゃない。棄てる時に面倒臭いじゃない。ホストとしちゃあ危険だよ、そう言うの」

骨の髄までアルコールがどつぶり染み込み、すっかり酔っぱらって。

何時も会う時のカッコ良い物腰とは違う、べろんべろんのだらしない姿で、生頭奈の憧れの彼は、人をヒトとも思わない本性を、例えるならそれはまるで大きな出来物できものを自慢するみたいに下品に丸出しにしていた。

☆ ☆ ☆ ☆ ☆

吹き抜ける冷たい風は、肌を刺す様でもあり、同時に心地よくもあった。

こんな風ふうに、風かぜの気持ち良さを心から感じる事が出来た頃がついこの間までであった事を生頭奈は思い出していた。

お腹にそつと手を当ててみると、小さな心臓の感触があった。

さつきまでは彼と自分との間の想いの証の様に思われていたそれも、今はもうお腹の中に残った排泄物みたいに、汚らわしくて、そして邪魔な物の様な感じがしていた。さつきと出してすつきりしたい。しかし、だからと言って、赤の他人の医者に自分の身

体の中を探らせる様な真似もするつもりは彼女は無かった。

お腹を地面に叩き付けるつもりで、彼女は寒風吹き荒ぶ夜の学校の屋上から飛び降りた。

☆ ☆ ☆ ☆ ☆

芽育生頭奈が——お母さんが飛び降りた後の事。

お腹から叩き出された赤ちゃんは——私は、芽育奈尾は、普通の新生児の半分の大  
きさにも満たない超未熟児だった。

### 3 泣き夜風呂（なきよぶろ）

△ニヤ △ニヤ △ニヤ △ニヤ △ニヤ  
 Z Z Z Z Z

おかあさーん、ひどいじゃん。

わたし、なにもわるいことなんかしてないよ。

こどもは、じぶんでうまれてくるわけじゃないよ。こどもは、おやがつくるものじゃん。うまれてきたのは、こどものせいじゃないよ。

わたし、うまれてたくてうまれてきたわけじゃないよ。

おかあさーん、おかあさーん。

△ニヤ △ニヤ △ニヤ  
 Z Z Z

ばんばんばんっ !!

「ふっ<sup>!!</sup>ぶくくぶくくぶくく、ぶくっっ」

「おーい、奈尾ーっ、奈尾ちゃ——ん!!」

お風呂のドアを強く叩く音にびっくりして、湯船に沈んでしまった。

お湯から顔を出し、反射的に身体中に線の様に走っている傷跡を指で触る。

もうよく見ないと分からない位<sup>くらい</sup>、でも確かに残っているそれは、私が生まれてすぐに

付いた傷だと聞いている。

母体越しにアスファルトの地面に叩き付けられた私は、血塗れ<sup>ちまみ</sup>で骨が折れていた。

助からないだろうとは思いつつも、お医者様は微かな可能性を信じて、独断で赤ん坊の私の全身の修復手術を行った。

未熟児として生まれて来た私が大掛かりな術式に耐えられたのは、多分奇跡だったの  
だろう。

「だいじよぶだったー？呼びかけても反応が無いからさー」

ドアの向こうからは、元気な声がする。

「……………寝オチしてた」

「あはは、やつぱりかあ」

偶に風呂呂に入りながらぐっすり寝ちやうと、昔の夢を見る事が多い。羊水に包まれていた頃の記憶を呼び覚ますからだろうか。

いけない、まだ身体を洗ってないじゃないか。

「あつこ、私が出るの待ってた？待たせちやってた？」

「ごめん、すぐ洗って出るわ」

「ぶいじよーだ、ぶいじよーだ！奈尾と一緒にわたしも入る！」

いや、ほんと、すぐ出るから待ってて、と言うよりも早く、勢い良くドアを開けて、生まれたまんまの姿のあつこが風呂場に入って来た。

「いや、良いからほんと。すぐ出るから」

「気にしない気にしない。わたしが奈尾と一緒に入りたいの！」

あっこは何に対してもモーションが大きい。湯船から風呂桶でお湯をすくって身体にかけるのも、湯船に入るのも。その体積の分だけお湯が溢れ出た。

「女の子なんだからもつと恥じらいを持ちなさいよ」

「えー、何でー？<sup>なん</sup>別に一緒に入っても恥ずかしくないじゃん？ だってわたしたちきょうだいなんだから」

本気で至極不思議そうにあっこが言う。ああ、こう言う裏表の無いところ、本当に見習いたいと思う。

<sup>きょうだい</sup>姉妹になつたのはついこの間の事でしょうに、とは流石に言えなかった。

あっこは私を貰ってくれた日<sup>ひつがや</sup>番谷と言う家の娘。

歳は私と同じ13歳だけど、私は後からこの家に入って来た訳だからまあ、義理の姉、か？

ほんとには一人でゆっくり入りたかったけど、まあ、この位フレンドリーに接してくれた方が、養子としてはありがたいのかもね。

と思っていたら急にあっこが裸のまま私にくっついて……いや、抱き付いて来た。ちよ、ちよつと、何やってるんですかあっこさん。おい、あっこ。

「うー、だって、このお湯何か冷たいよう。奈尾にくっついてるとあつたかいんだもん」

ああ、お湯がすっかり冷めてしまっていたみたいだ。ずっと入っていると分かんないもんだな。

「お湯、追い炊きしよつか」

私は追い炊きのスイッチを入れようとしたが、あつこが私の身体に密着している所為で立ち上がってスイッチを押せない。

「あつこさーん！一回離れてくれませんかねー！あつこさーん！おいあつこコラア！！」  
「ううう寒い寒いよお」

あつこを怒りながら、心の中に揺らがない安らぎがある事を今日も実感した。

あのままだな人生を受け入れて生き続けていたらと思うと、本当にゾツとする。多分私は惨めに死んでいたんじゃないだろうか。

切り拓いて、自分の力で確かに前に進んで行く力を、あの人 gave くれたんだ。

## 4 コールド・ブルー

私のお母さんは、高所から飛び降りた際に死んでしまったと私は聞かされていた。けれどもそれは事実では無く、本当は祖父母に親子の縁を切られ、それから何処へとも無く去ってしまったと言う事を最近になって知った。

気持ちが悪い程の笑顔でもって、私はおじさんおばさんの家に迎え入れられた。

おじお婆の家での暮らしは、遊びも、勉強も、その気持ち悪さにさえ目を瞑れば、実の娘の様にとても大事に扱われ、順調に過ぎて行った。

おじさん達夫婦が夜中に私にばれない様にお母さんの悪口を言っている時はちよつと心の奥が傷んだが：でもそれは翌日にテレビを見たりマンガを読んだりすれば何とか忘れてしまえる程度の傷、治る範囲内の傷だった。

そんな風におじさんの家で過ぎて行く、油を注さしてない時計の中で過ぎて行く日々の、ある日の事。

学校から帰って来ると、おばさんが学校であった漢字のテストを見せる様に言った。

何処の学校もそうなのかは知らないが、私の通っていた小学校では漢字テストは百問で百点で、しかも一回目のテストで間違えた所を全部正しく答えられるまで学校に残られるのだ。

その時の私の得点は八十点だったので、つまり二十問をもう一度やらされた。

それで何時もよりも帰りが遅くなった事を怒られるのかと思ひ、私は縮こまつたが、私の予想に反しておばさんにはっこりと笑つて言つた。

「良いのよ。奈尾ちゃんは勉強するのは得意だから、次はもつと良い点を取れるわよ」  
その時、何時もの気持ち悪い感じを通り越した、身体の真ん中を冷風が通り抜けて行く様な薄ら寒さを感じた。

その時に何故かふと、あれ、同じ学校に通つていゝところはまだ歸つて来てないのかな、と思つた。

その日以来、私はその身体の中の寒さを頻繁に感じる様になつた。

感じるのは決まつて家に居る時、一日に二回は必ずあり、日によつては五回や六回、毎日何時来るかは予測がつかなかつた。

私は昼も夜もそれに怯え続け、それを感じた時は取り敢えずその場は普通を装ひ、後で部屋に入つて毛布を被つてガタガタと身を震わせた。

そして、そんな事が続いている内の別のある日、遂に私はそれがどんな時に来るのか

を発見した。

例えばおばさんが料理を作っている時、ゲームに熱中していて手が離せないところも先に、私がテーブルに料理を盛る食器を並べに来た時。

例えば動会の徒競走で私の順位がいとこより上だった時。

そして、例えば私のテストがいとこよりも出来が良かった時。

「偉いねえ。凄いねえ。本当に奈尾ちゃんは何でも良く出来るねえ。

これなら、将来社会に出て行っても大丈夫だ。誰にでも気に入られて、上手く立ち回って、取り入って、何をやっても得が出来て、誰に似たのかな」

不良娘と、人をたぶらかす悪い男の間に出来た子供の癖に。

おじさんが、おばさんが、それからおじおばと親しい親戚が。口では言わない。言う訳がない。

でも、心の中でそう言われた気がした。

## 5 美樹との遭遇

虫の音が煩い。何処か遠くで、つまらないバイクの爆音がする。何処かの家が窓を閉めて眠ろうとしている。何処かでネコが喧嘩してる声が聴こえる、煩い。虫の音が煩い。誰かがお風呂に入ってる音が聴こえる。虫の音が煩い。

夜空を見上げてみた。星が一つも無い中で、飛行機だけがぼつんと星の様な光を放つて何処かに飛んで行く。虫が、虫の音が、鳴き声が本当に煩い。

☆ ☆ ☆ ☆ ☆

最初にあの冷たさを感じた時から数ヶ月、少しでも褒められようと私が頑張ると、『人を誑かす様な父親の娘だから、そんなに要領が良いのねえ』

そう言われるのが嫌だったから、偶にちよつと手伝いをするのをやめてみれば、

『あら、気楽そうで良いわねえ。毎日遊び歩いている様な母親の娘だから、人に迷惑をかけても何も感じないんだわ』

こう言う有様だった。もうその頃になるとおばさん達は私に対する悪意を隠そうとしなくなり、おじさんやいとこまでそれに加担する様になって、私は冷たい感情のシャワーを浴び続けた。

その日の夜、おばさんは私に突然少しばかりのお金を差し出して言った。今日からご飯は外で何か買って食べなさいと。

何も言えずに戸惑っている私を暫く見下ろした後、おばさんは深い深いため息を吐くと、

『あのね、貴女は本来うちの一家とは何の関わりも無いの。お父さんお母さんに子供として認知されて無いんじゃないやあ、伯母の私とだって他人同士みたいな物でしょう？可哀想だからうちで預かってあげてるだけなのよ。そうよ、ただそれだけの関係なのよ。だから、貴女なんてね、うちで飼ってる、何ていうの、ペット、そう、ペットの様なものなのよ。どんなに大事に大事に育てられてるペットだってね、家族と一緒に食卓について食事をしたりはしないでしよう？イヌがテーブルに座って、スプーン持って、カレー掬って食べてるのなんて想像出来る？』

大体貴女は何？何時も何時もこの世の終わりみたいな暗いオーラ出して、毎日餌を貰ってブラッシングもされて芸も仕込んでやってるのに生意気だわ。ペットの癖に。ペット風情が。貴女の周りのその辛気臭い空気が私達にまで伝染<sup>うつ</sup>って私達まで気分がくさくさして来そうだわ。まるでばい菌の保菌者みたい。ばい菌人間。ばい菌ペット。ばい菌動物。バイキンマン。

あんたがそういう気なら、良いわ、今夜一晩位家に帰らないで、どっかで野宿でも何

でもして来たら良い。それで何時も育ててやってる私達の恩が分かるでしょう。ついでにばい菌も落として来たら良い。

何をしているのとつとと食べに行つて来なさいよほら、行け、行つて来い。お前の頭が冷えるまで帰つて来るな!』

☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆

寝静まった街のあの日の私の姿を傍目はためから見たら、それは母の姿に似ていただろうか。

「…♪…どうして…ふんふんふん…たくなくて…」

TVのCMか何かでやっていた、ゲームの主題歌?を、ただ何となく歌っていた。そうでもしないと、今までおじお婆の家で溜め込んで来た凍える程に冷たい思い出が胸の奥から溢れ出して来て、モンスタアの様に私を飲み込んでしまいたいそうだったから。

「…ふんふんふん…むきあつた、あつ!」

そうしたフラフラと覚束ない足取りで夜の街を歩いていた物だから、途中でつまらない石に気躓いて、転んだ拍子に地面にへたり込む。

膝小僧を見てみると、赤く血が滲んでいて、それが非常に痛み、何だか涙が溢れて来た。

ばい菌人間。ばい菌動物。ばい菌。

おぼさんの言葉が脳内で何度もリピートする。

もう、嫌だ。もう限界が来た。いや、とつくの昔に限界なんて通り過ぎていた。

何もしなくても、ただそこにいるだけで周りが不快に感じるのなら、私は何の為にこの世界に存在しているのだろうか。

しばし、うずくまつたまま、子供の様にぐすぐす泣いた。泣いたって良いじゃないか。だって、私はまだ13歳だよ？ 十分子供だよ？

やがて、生暖かい風が吹き始めたのを感じ、顔を上げると、そこには身長が何メートルもあるお坊さんがゆらりと立っている。

直感的に、そして馬鹿にあっさりとして、私は状況を受け入れる事が出来た。ああ、今から私は、目の前に居るこの化け物に喰われて死ぬんだなあ。もう何でも良いや。どうせ生きてたって良い事無いもん。私要らない子だもん。

お坊さんの姿をした怪物が、アホみたいな無表情のまま、大きく息を吸い込み始めた。それに合わせて、私の頭の中の何かがずるずると耳や鼻や口、全身の穴と言う穴から大気中に引きずり出されて行くのが分かった。その感覚が、生暖かい闇に堕ちて行く様で心地良かった。



「馬鹿っ!!!」

最初は稲妻だと思った。

強い、蒼い閃光に思わず目に手を翳し、それを離すと、そこには家でよくやるRPGの勇者みたいな恰好をした、白いマントに手袋の少女が凜として立っている。

ああ、私もとうとうアタマに来たんだな。そう思った。

## 6 ブルー・シャドー

「あんだ、自分の命は大切にしなきゃいけないよ」

そう彼女が言ったのが耳に届いた数秒後には、もう熾烈なチャンバラ戦が始まっていた。

レーザーの様な細い光線をかいくぐり、蒼い光が闇の中を飛び回って細長い二本のサーベルで怪物の大群を輪切り、撫で斬り、滅多切りにする。巨大な人影が霞の様にばふつ、ばふつと振り払われる。

当然怪物達も黙ってやられるつもりは無いらしく、数匹が仲間を盾にしつつ、マントの少女が着地した瞬間をよく狙って同時に光線を照射した。

「がふ……………っ！げほ、げほ」

「あ……………」

身体に風穴を開けられ、血を吐く少女。只の人に過ぎない私は、見ている事しか出来なかった。

地面に倒れた少女に吊いのお経をあげようとするが如く、手の平を合わせてにじり寄る坊主の巨人の群れ。正に絶体絶命かと思われたその時！

「な、め……………んな」

ボロキレと化していた少女の身体が、ぴくり、と動く。そこから先は、信じ難い光景だった。

今にも死にそうな全身にぶるぶる震わせながら力を込め、剣を杖にして立ち上がると、彼女の身体を包むぼうつとした蒼い光が一際強くな<sup>ひとよ</sup>って傷が見る見る内に塞がって行く。

怪物達が後ずさりし始めた。

「待ちなさいよあんた達……………花も恥じらう美少女の身体に穴開けて、<sup>ただ</sup>只で帰れるとでも思ってたの！」

彼女は怪物達が離れてしまう前に、驚異的な早さで、冗談を飛ばす余裕が出来る程にまで回復を終えると、今度は空中に剣を大量に召喚して魚雷よろしく撃ち出した。怪物の巨体が次々倒れて行き、間一髪で直撃を免れた数匹が闇の中に逃げて行こうとするも、高く跳躍したマントの少女が空中でその行く手を塞ぐ。しなやかな肉体が月光を受けて輝いた。

「一匹も逃がさないっ!!」

一閃、二閃。素早い剣戟が残り全ての怪物共の首をズンツと刈り飛ばす……………戦いが始まってからここまでが、殆ど一瞬の出来事だった。

彼女が地面に着地すると、数秒遅れて、何やら黒い物が大量にザラザラと降って来る。一瞬電かと思つて驚いたが、よく見るとそれは、サイコロ大の小さなキューブだった。はつ、はつと肩で大きく息をしながら、彼女が真つ直ぐこつちを見ながら近づいて来て、私のすぐ目の前で立ち止まった。

直前まで眼前で行われていた活劇に見とれていた私は、急速に現実の世界に意識が戻つて来ると、お礼を言うでも無くそっぽを向いた。

「余計な事……………して」

「助けてやってそれは無いんじゃないの」

「……………」

「死のうとしてたね？」

下を向いたまま何も言わずにいると、いきなり両肩を掴まれて前を向かされた。

「死ぬ勇気があるんならちゃんと生きろ！」

それでも私が答えないので、勇者の格好をした彼女は続ける。

「何があつたか知らないけど、そんな簡単に自分の身を捨てちゃ駄目だよ！虚しくない？折角この世に生まれて来たのに、世界の意地悪に負けて、悲しいまんまで消えて行くなんて…悔しく…ないの？」

「……………」

「例えどんな事があつたつて、自分だけは泣かせるな！」

「……………ふざけてんのか、この銃刀法違反野郎」

マントの少女が「え」と言葉を詰まらせる。

反応に困っている間に私は一気にまくし立てた。

「なあにが『自分だけは泣かせるな』、だよ。こつちが黙つてりやあ余計な事ばつかばあばあばあばあ言いやがつて。こつちを助けてヒーローごっこやりたいだけなら一人でやれよ。死にたい奴に構うんじゃねーよこのアホウ。家も家族もあるお嬢さんはこんな夜遅くまで出歩いてないで帰つてクソして寝てろよ！」

……………恥ずかしながら、この時の私はめっちゃ口が悪かった。

勿論学校の先生と話す時とか、敬語を使う事が無い訳ではない……………けど、仮にも命の恩人に対して、何を考えていたんだろうこの時の私は……………。

ガキの私のガキらしい他愛も無い悪口を聴いて、しかし私の恩人は、少しならざるシヨツクを受けた様子だった。言葉を飲み込んで、唇を噛んで、苦虫を噛み潰した様なとは、あんな顔の事を言うのだろうか。

そこから暫く、暴言を吐きっぱなしだった。

彼女は私が自然に落ち着くまで待つ事にしたらしく、ただただ私の酷い言葉を聴いてくれた。

「舐めんじゃねえ……ふざけやがって……」

「うん、分かった。ごめんね」

「良いから死なせろよ……もう絶望しかねーよ本当……」

「そんな事無いって。ほら、あそこに座ろ」

「くそ……くそお……！何でだよもう何もかも……！

教えてくれよ勇者さんよお。誰も彼も私の事を要らない子だ、汚い子だつて言うんだよ。

誰も私を要らないなら、何で私は生まれて来たの？

教えろよ！今すぐあんたが教えろよ！」

そこからの詳しい経緯は忘れたが（何しろ精神的にボロボロの状態だったので）、兎に角私は、この見知らぬ人に、自分の身の上を話した。

初対面の相手に何故いきなりそこまで気を許す事が出来たかと言えば、強いて言うなら、相手の中に少しだけ自分と似た物を感じたからだ。

おぼさんの言動の中に薄ら寒さを感じたと言う事は、既に書いたと思う。昔からそうなのだ。相手の言っている事が本気なのかどうかとか、本性？みたいな物が、少し話しただけで何と無く分かってしまう。多分、おじおぼの顔色を窺いながら生活している内に身に付いた特技なんだと思う。

いや、持っている本人が好きになれない物を「特技」と呼んで良いかどうかは微妙な所だけだ。

きつと相手も、私がやっている様に話をしながら私の中にじつと目を凝らしていたと思う。きつとこの人も苦勞して来たんだらうなあと思った。

それ以外に彼女の中に感じたのは、正しさだ。

とても正義感が強いのが見て取れた。

正義感が強くて、そしてぐちゃぐちゃだ——自分のしている事は正しいのか、本当に誰かを救っているのか、偽善や自己満足になってしまっていないか、そんな事ばかり、いつもいつも、ぐるぐる悩み続けているらしい。人助けは向いてないんじゃないかとすら思えた。

でも、でもだ、と私は思う。こういう性格は嫌いじゃない。

「……………あんた、苦勞して来たんだね」

道沿いに作られた花壇に並んで腰掛けて、自殺未遂少女と勇者少女が項垂れる。うなだ  
彼女の身体が放つ光で、私の手元は本が読めそうなほどに明るくなっていた。

「……………生まれてからずっと、耐え続けて来たんだね」

「……………私の気持ちがあんたに分かんのかよ」

敢えてちよつと意地悪な事を言ってみる。腹を探るだけでは、完全には分からない人

柄がある。

私はこの人に興味を持ち始めていた。

「……………分らない。あたしがあなたの人生を体験は出来ないから、こうして話を聞いて、あなたの気持ちを想像する事は出来ても、本当の所は分からない……………」。

多分ね、あたしは、毎日幸せ過ぎて、バカになっちゃってるんだと思うんだ」

「馬鹿……………」

「そう、幸せバカ……………そんなあたしが誰かを助けた所で、結局は自己満足に過ぎないのかも知れない……………もしかしたら、それが原因で余計悪い事になっちゃったり、迷惑に思う人も居るかも……………」

「ああ、私は迷惑だよ」

ぐ、と言葉を飲み込む。それでも、もどかしげに、でもはつきりと、彼女はこう続けた。

「でも、でもね、あたしはそれを言い訳にしたくないの。

だってあたしは……………魔法少女だから。困っている人を助けて、生きるのが辛そうな人の手助けをして、それを邪魔する奴等を倒す。それを続けるしかないの。そういう生き方を選んだの。例えば答えなんか出なくても……………」

「……………」

「ごめんね、偉そうで。実を言うと、あたしも最近始めたばかりなんだよね、これ。まだ分かんない事だらけだよ、本当……………」

これ、と言いながらマントの端をつまんでひらひらさせる。

それは私にとつて新鮮な体験だった。未だかつてここまで親身に話してくれた人が、私の人生に一人でも居ただろうか。

「じゃあ、こう言う事にしない？」

と、数秒の間があつて、彼女が唐突に口を開いた。

「これからは、あたしとあんたで、一緒に頑張ろうよ」

「ん？」

まじまじと彼女を見る。

「あたしも、こんな曖昧な自分を変えて、あるべき姿を見つけて、本当の意味で人を救えるようになる。ごっこじゃなく、一人前のヒーローに何時かなってみせる。だから、あんたも今の状況を変えられる様に、あたしと一緒に頑張ってくれない？ やっぱり、このままじゃいけないし、絶対に方法はあると思うからさ……………」

お互い離れた所に居ても、相手が何処かで頑張つてると思えば、心強いと思うんだよね。あたしなんかじゃ頼りない……………かな？」

ほんのちよっぴり自信無さげに彼女がこっちを見て来る。

誰かと一緒に……………何と甘美な言葉だろう。それは、弱り切って傷だらけだった私の心の奥まで、深く沁み込んで行った。

「……………その方が良いかな。私も……………」

私の恩人は、暗闇を照らす眩しい笑みでその言葉に答えてくれた。冷え切っていた胸の奥が暖かくなって行くのを感じていた。

## 7 ドント・ストツプ・ミー・ナオ

その翌日から、私は作業に取り掛かった。

しかるべき相談所におじおば家族の目を盗んでこっそり電話をかけたのだ。いとこが学校から貰って来た、電話番号が書かれたカードが要らな—いとゴミ箱に捨ててあったのが役に立った。

児童保護施設の人にはおばさん達を訴える事も出来ると言われたが、やめておいた。一応育てて貰った恩はある。二度と私の目の前に現れないでくれれば充分だ。

その後、施設に引き取られてからそう時間もかからずに無事に引き取り手の見つかった私は本当にラッキーだと思う。新しい父親の拓真<sup>たくま</sup>さん。母親の摩耶<sup>まや</sup>さん。そして、姉妹の敦子。現在私が住んでいる日番谷の一家だ。

施設を抜ける際、他の子供達の恨めしそうな視線が直視出来なくて、逃げる様に出た。行つた。

施設に居た頃の記憶は、期間が短かった所<sup>せ</sup>為<sup>い</sup>か実は非常に曖昧だ。元居た所から結構遠く、違う市だったかも知れない。顔や名前を思い出せない子も沢山居る。今頃どうなっているのやら……

印象に残っている事と言えば……何だろう、赤いツツジが綺麗に咲いていた事位かなあ。

あ、後、院長さんがめっちゃ良い人だった様なよき。まあ、どちらにせよ大した手掛かりにはならないだろう。

そんな事があつてから一か月程経つた頃だろうか？

日番谷一家は、皆、善良で話しやすい人達で、言わば居候の立場に過ぎない私を快く受け入れてくれたお陰で、すぐに馴染む事が出来、新しい家に移つてから転校した学校も居心地がよく、前とは違つて友達なんてもうまで出来た。と言うか、それは私自身の変化だったのだろう。自分の存在を認めてくれる人達が出来たお陰で自分に自信が付き、他人と物怖じせず話せる様になつて行つたのだ。私が相手の気持ちが無く分かる事を自覚し始めたのはこの頃で（それまではみんなそうだと思つていた）、その技術の社会での使い方を少しずつ模索していた。

私の新しいお母さんと言うのは、世間の「お母さん」と呼ばれる人達と比べるとちよつと若い（私の本当のお母さんよりは年上だろうけど）凄い人で、毎日何か一つは私の事を褒めてくれる。特別な事でなくても、大袈裟な位に。

「へえ、クラス委員になつたんだ？ 凄いじゃん、頑張つて」

「手伝つてくれてありがとう。奈尾が居てくれて本当に助かつてるよ」

「奈尾の笑顔は可愛くて素敵だね。もっと沢山笑いな」

別に気を遣ってくれている訳じゃない。気を遣っていれば、私には分かる。おばさんのような含みも無い。

勿論私だけ鼻唄されているって訳じゃ無くて、あつこにもちやんと同じだけの言葉をかけている。愛情を注いでいる。

ひよつとしたら他の家庭ではそれは当たり前前の事なのかも知れないけど、事あるごとに罵声を浴びせられていた前の家と比べたら、最高の場所だった。

幸せだった。今もとっても幸せ。

だが人間と言うのは、どうやら幸せでも思い悩む生き物らしかった。寧ろ<sup>むし</sup>幸せだからこそ、その頃の私の胸の中に生まれた思いがあった。

私……こんなに幸せで良いのかな？

幸せなままで……良いんだろうか？

世の中には世間に知られていないだけで、かつての私かそれ以上に不幸な人達が沢山紛れているんじゃないか？「幸せである」と言う事がどんなに幸せなのか、分かっている（つもり）。子供の戯れ言<sup>ざ</sup>と思つて大目に見てよ）の私だからこそ、出来る事は……無いのかな。

その頃の私は、何時か家を追い出された夜に私を助けてくれた、人生を自分自身の手

で切り拓くきっかけを作ってくれたあの人の事ばかり思い出していた。

魔法少女。

確かにそう言っていた様な……。

そうだ、考えてみたら、あの日、私はあの人にお礼すら言わなかったじゃないか。

あの人にもう一度会いたいな。私も、その、「魔法少女」とやらになれば、何処かで会えるのかな……どうやってなったもんか。

何度倒されてもすぐに立ち上がり、誰かの心を切り刻む不幸を吹き飛ばしてあげられる様な人に、私もなりたい。

丁度ちようどそんな時期に友達から聞いた話だった。

「……それ、私の前の家の近くかも」

「マジで？ ヤバいね。」

住む人の居なくなった古い教会が、何でか取り壊されもせずそのまま放置されてるんだって。

何かね、実際その教会って言うのもちよつといわくがあつて、数年前に急にテレビに取り上げられたり有名になったと思つたら、突然牧師が奥さんと娘達を刺し殺して自分も首を吊って自殺しておまけに教会に火を付けちやつたんだって。娘の一人は今でも死体が見つかつてないみたい」

「何でまた……」

「だからさあ、呪いだって。オカルト的なアレなんだって。」

実際、牧師も死ぬ直前に『この教会には魔女が住み着いている』とかブツブツ言ってるのを見た人が居るってさ」

今じやすっかり廃墟になって、周辺住民にはオバケヤシキと呼ばれるその教会に『彼女』は居るって、風見野市じゃ専らもっぱのウワサ、オーコワイ、と、その友達は奇妙な節を付けて歌う様に言った。

単なる「ウワサ」として片付けてしまえばそれまでだが、直感にピンと来る物があった。

その日は授業が終わるとその足で図書館に行き、当時の事件の資料が無いか探した。

「……『あんず』？……『あんこ』？……『さくらきようこ』……佐倉？」

## 8 魔女教会で会いましょう

ぽかぽかとした日の当たる早朝。風見野の教会に続く坂道は、道に沿って梅の花が咲いていて綺麗だった。

こうして歩いていると、徐々に呼び覚まされて行く。風見野での楽しい思い出、そして……思い出したくない様な思い出も。

「ハッスル、ハッスル……」

と言うのは気合を入れたいときに使う、私なりのおまじないだ。

長い坂をてっぺんまで登ると、焼け焦げた建物に辿り着く。かつての教会なら丁度ミサが行われていた時間だと言う事が事前のリサーチで判明している。

監視カメラも無い様だったので、「立ち入り禁止」の標識を通り過ぎて堂々と門から入った。

「荒れ果てちゃって、まあ」

幼少の頃に走っていた記憶がある渡り廊下を抜け、客間に入る。協会の中はさほど焼けてはいなかったものの、ガラスが割れ、置いてあった筈の物が無くなったりしている様に見える。

「……………火事場ドロって奴？」

仮にも神の家なのにバチ当たりな物だ。

今の所、人の気配はないが、『彼女』が居た場合の事を考えて、部分によつては踏み込んだら抜けそうな床を出来るだけ静かに歩いて行く。

最も注意すべきなのは礼拝堂に入る時にある扉だ。こう言う長い間手入れのされていない古い建物は、扉の開閉の際に得てしてギーツと大きな音を立てる事が……………扉が無いな。蝶番ちようつがひから外れてる。うん、中に入ろう。

頭だけそーつと部屋に入れて中の様子を窺うと、ヒビ割れたステンドグラスから射し込む光に赤い影が照らされていた。

居た居た、会いたかった人物だ。

かなり癖の強い、ごわごわとした長い髪をポニーテールに結った少女が、十字架の前で膝をついている。背丈からして、歳は多分、私と同じ位。服はくたびれていて、まるで同じのを続けて何回も着ているみたいだった。

（お祈りつて本当にするんだ……）やっぱりクリスチャンらしい。

抜き足、差し足で近付いて行くが、やはり建物が古いせいか、キイ、と床が音を立てて軋んだ。

あ、ヤバい、と思ったが、彼女は気に留める様子も無く、祈りの姿勢を崩さない。

さて、どうしたもんかな。中程なかほどの席まで来て、私は考える。

話を聞いてはみたいが、神聖な時間を邪魔するのも悪いし……………

お祈りは一向に終わらない様子だ。もう、こうなったら、いつそ私も一緒に祈らせて貰う事にしようかな？ うん、そうしよう。

瞳を閉じて。頭こゝろを垂れて。

「……………」

「……………おい」

「……………(ZZZZ)……………」

「おい、あんた」

「すーすーすやすや……………」

「おい！」

「フガ」

「おいって!!」

「ハナクソ付いた指であつちむいてほい仕掛けて来るなあッ

!!!!!!

——あつ、あああつ!!」

ビクツ、と、魚が跳ねる様に船を漕いでいた頭が起こされる。不覚だった、まさかここで居眠りをこいてしまうとは。普段より早起きをしたのが仇となったか。

私を起こしてくれた長髪の少女は、気まぐれだが確かなパワーを持った、丁度ちやうどライオンの様な目でこちらを怪訝けげんに観察している。最悪だ、これから話を聞こうと言うのに、ファーストコンタクトがぶち壊しではないか。

「ああ、ち、違うんです、寝てた訳じゃないんです」

いやいやいや何を言ってるんだ私は。さっきまで完全に意識が飛んでただろうが。素直に認めなさいよ往生際が悪いな。

長髪の少女は最早呆れた顔になっていた。

「別に怒りやしねえよ。教会がやってた頃にも説教の最中に寝てる子供はいた。やましい事があるみたいにはビクビクしてんな」

少女の男っぽい荒々しい口調はあまり私を落ち着かせる効果はもたらさなかったものの、取り敢えず怒ってはいないらしく、そこだけはホッとした。

「それより誰だい、あんた。こんな焼け落ちた神の家の残骸に一体何の用事があるってんだ？」

焼け落ちた神の家の残骸、と言った部分から若干の自嘲的なニュアンスが感じられたのを私は聞き逃さなかった。

「な、何の用がって、そりゃあお祈りをしに来たんです」

「ふーん、あつそ。その割には気持ち良さそうにお休みだったけど。何をお祈りした？」

「そうですね、家内安全と学業成就を」

「神社じゃねえよ」

少女が苦笑した。段々警戒が解けて来たらしい。

「……この教会ね、小さい頃に何回かだけ来た事があるんです」

「信者の娘つてとこか？」

「毎年、クリスマスとハロウインに子供に開放してましたよね。手作りのお菓子配って」

「そつちかよ。そう言う事だったら、昔どつかであんとすれ違った事位はあるのかもね。そう言う日はあたしも一緒にはしゃいでたし」

「美味しかったなー、あれ。途中からやらなくなっちゃいましたよね？」

「……………教会に金が無くなったからね」

踏まなくても良い地雷を踏んだかも知れない。彼女の顔が唐突に曇ったので、私は内心慌てた。

長髪の少女がゆつくりと口を動かす。

「……この牧師は……不器用な男でね。世の中を憂いて、自分なりにみんなの為に考えた新しい説教を、ある時から信者にする様になった。新しい時代には新しい教義が必要

だって……間違つた事なんか一つも言つてない、でも新しすぎた。元の教義とあまりにも違い過ぎて、結果、周りの奴等は怪しい新興宗教と勘違いしやがった。お布施ふせはガクツと減つて、牧師も、その妻も、子供達も、毎日食うにも困る有り様だつたんだと。——それでも、あの人は絶対に自分の考えを曲げたりはしなかつた。絶対に、正しいつて信じてたんだ……！」

知つていた。だからこそ私は此処には何かがあると踏んだ。分からないのはその後牧師の教えが世の中に浸透して牧師の一家がまた裕福になり、その後謎の自殺を遂げた事だ。

彼女の話の最後の方は歯を噛み締めながら喋つていたので消え入りそうに声が小さかった。その思いは果たして何だろう。大切な人が世の理解を得られなかつた悔しさか。自分達を振り回した恨みか。

牧師か、どんな人だつたかな。もうおぼろげな記憶しかない。風見野での記憶は今ではもう殆ど薄れてしまつている。楽しかつた思い出も。

子供好きで、如何いかにも良いお父さん、と言つた感じの人物だつたと信じたい。

「……ひよつとして、お姉さんは牧師を守る為に、今の道を選んだんですか？」

「……そろそろ何モンなにだか教えろよ。こつちも腹を割つて話したんだ」

思い切つて勝負をかけてみた。もう後には引き下がれない。

「佐倉杏子さんですよね？」

「……………」

「魔法少女の佐倉杏子さんですよね？」

杏子さんは何も答えない。私は構わずにその先を言った。

「私、魔法少女になりたいんです。ふざけると思われるかもしれないけど、本気なんです。魔法少女のなり方を教えて貰えませんか？」

「……………ついで来な、場所を変えよう」

「こんな所じゃ落ち着かねえだろ、と。杏子さんは歩き出した。

「あたしなんかよりずっと頼りになる奴を紹介してやるよ」

## 9 お前を魔法少女にしてやるから魔獣を倒してくれ!

「佐倉さんお待ちせ」

待ち合わせの場所に呼ばれてやって来たのは、髪をスパイラル状にカールさせた髪型の、かーなーリグンバツなスタイルのお姉さんだった。

私と同じ中学生だと聞いていたので、一瞬間何かの間違いなんじやないかと思った。

その後一同が集まったのは、見滝原市内のファミレス。待ち合わせ場所から歩いてファミレスまで移動する間、中学生離れしたお姉さんは、通っている学校は何処かとか、緊張しなくても大丈夫だからねとか、よく私に話しかけてくれていた。あ、良い人だな、と分かる。ちゃんと責任感を持って私と接しようとしてくれてるが、ちよつと気張り過ぎにも見えて、却ってこつちがちよつと心配になりそうな位だった。ここまで来たら流石に緊張はしてないから大丈夫だよ。

で、杏子さんはその間何をやってたかと言えば、一言も喋らないでおまんじゅう食べた。紅白のまんじゅうを、歩きながら。

スパゲッティカルボナーラとピラフとカニ玉がほぼ同時にやって来る。お昼時を少し過ぎた時間だったので、店内は勉強の為にドリンクバーで粘っている学生以外には客

は少なく、空いていた。

杏子さんはきちんと手を合わせて「いただきます」と律儀に言ってからピラフに手をつけ始める。さつきまでまんじゅうを食べていたと言うのに、この人の食欲には際限さいげんがないのだろうか。

「えっと、芽育、奈尾さんで良かったかしら」

「あっはい」

良い人のお姉さんは道中の会話で自分の名前は「巴マミ」だと教えてくれた。磨かれた様に綺麗な、白くてほっそりとした手がフォークとスプーンを操ってスパゲッティを巻き取って行く。

「芽育さん、佐倉さんから聞いたんだけど、貴方、魔法少女になりたいのよね」

「はい、そうです」

「この街にはまだ魔法少女の素質がある子の気配がする、と言うのは、僕も何となく感じてはいたよ」

と、唐突に、私とマミさんの会話に割り込んだ者が居る。

ファミレスの窓の縁ふちにちょこんと座った、白い哺乳類っぽいモノ。よく分かんないけど、魔法少女となる為に必要な「契約」を結ぶ、「魔法の使者」であるらしい。

魔法の使者「キュウベえ」は、澱みの無い、まるで電話の音声案内みたいな調子でつ

らつらと続ける。

「だけど、それでも僕はわざわざ君の事を捜そうとはしなかった。魔法少女は多ければ良いと言う物じゃない。つまり君の今の強さはその程度で事さ。伸びしろが多いとも言えるけどね。」

僕としては即戦力とは言い難いが、しかしまあ欠員補充には丁度良いんじゃないかと思おうね。マミと杏子は

「暫く黙つてろ。てめえ刺すぞ」

セリフじみた発言を遮り、杏子さんがドスの効いた低い声で言う。

「OK、分かったよ」

ぎつ、と実際に音がしそうな程鋭い目でキュウベえを睨み付ける杏子と、さつきと全く様子が変わらないキュウベえ。……欠員補充？

何か引つかかったが、取り敢えずその時は気にしない事にして、マミさんの話に意識を戻す事にした。

よく考えてから決めて欲しい、貴女が後悔する事になったら私達も悲しいから、と前置いて、マミさんは彼女達の世界の全貌を説明してくれた。

「魔法少女になる子は、皆最初にキュウベえに自分の『願い事』を言うの。どんな願いでも一つだけ叶えて貰える代わり、魔法少女はその先の一生を、人間を襲う『魔獣』との

戦いに捧げる。これが魔法少女になる為の『契約』よ」

『魔獣』と言う存在には心当たりがあった。あの日、あの白いマントを着た魔法少女と出会った夜、私に襲いかかって来たよくわからないなにか、あれがきつと『魔獣』だ。

『願い事』か。と言う事は、杏子さんとマミさんも、過去に何かの願いを叶えて貰って事だ。

「そして、これは『ソウルジエム』。契約を結んだ女の子達が生み出す宝石で、魔法を使う為にはなくてはならない物よ。魔獣が近くに居ればその存在を感じ取る事が出来るし、魔法少女の服や武器を出したりも出来る。……………そして、『ソウルジエム』を失う事は、そのまま私達にとつての『終わり』を意味する」

マミさんの『ソウルジエム』は黄色。杏子さんは赤。どちらも小さな卵の様な形をしており、何とも表現の難しい光り方をしている。まあ、所謂いわゆる変身アイテムって認識で間違っていないと思う……しかし、『終わり』とは？

『ソウルジエム』からあまり離れすぎると、私達の身体は機能を停止する。破壊されればその息は絶える。でも、ジエムに何かない限りは、どんな怪我や病気でも魔法の力で治す事が出来るの。

『ソウルジエム』とは、文字通り私達の『魂』——手に取って守れる様に、身体から分離させられた生命なのよ」

「人間やめちまっても惜しくないかどうか、そう言う事だ。後戻りは出来ない」

杏子さんが口を挟んだ。

ニンゲンやめる……うーん、解釈次第ではそうも言えるか。実を言えば、杏子さんの言葉を聞くまで、私はソウルジェムと魔法少女の身体の関係を、リモコンと遠隔操作のロボットみたいにイメージしていたので、事の深刻さがイマイチよく分かっていなかった。小さな宝石に自分の生命を握られている。確かにこれは重大な事だ。

その後もお二人は、魔法少女になりたい私を思いとどまらせようと説得を続けた。生命の危険から、魔法少女になると時間が無くなつて、他の事をやる暇が無くなると言った事まで。私も自分の身の上を二人に話した。二人は真摯な態度で、私の話を聞いてくれた。

が、私だって半端な覚悟でこうして来た訳ではない。つて言うか寧ろ、

「いやあ、お二人のお話を聴く程、やりたくなるんですね」

「は？」

杏子さんとマミさんが一瞬、呆気に取られる。暫くはそのまま言葉を失っていたが、やがて杏子さんが口を開いた。

「なつ……何言ってるんだお前? 今まであたしらの何を聴いてたんだ?」

「だつてお二人共、本気で私の事考えて言つて下さってるでしょ? まだ初対面なのに

……」

話はやんと聴いていた。そして、嫌と言う程分かった。この人達は、本当に頼りになる人達だ。私が戦う事になっても、この人達について行けば、きつと大丈夫だ。

「そんな人達と一緒に頑張れたら、私、幸せだろうなあつて」

「芽育さん……………」

「ママさんが少しだけ照れた様な仕草を見せたが、杏子さんは「お、ま、え、なああ」と唸りながらずかずかと歩み寄って来ると、私の胸ぐらを引つ掴んだ。

「佐倉さん！」ママさんが叫ぶ。近くに居た店員が、私達の方を見てフリーズしている。杏子さんは刺す様な視線で、至近距離から私の顔をまっすぐ見ていた。

「ムカつくんだよ。軽いノリでこつち側に入って来ようとしやがって。魔法少女なめてんじやねーつての」

「……………」

「良いか？あんたが魔法少女になったら、魔獣に感情を喰われる前に真つ先にあたしが殺しに行つてやる。手足を斬り飛ばした上で、常人だったら十回は死ぬような傷を負わせてからソウルジェムを踏み潰してやるからな。その覚悟があるなら来なよ。歓迎してやるからさあ」

## 10 決めたよPuella Magi

……………と云う出来事があつたのが数週間前の事。

「………つたく、柄にもなく散々言つて聞かせてやつたつてのに」

キュウベえと真つ直ぐ向かい合つた私の後ろで、杏子さんがぼそりと呟いた。

あれから杏子さんからは何度も思いとどまる様に説得されて、それでも私は諦めなかつた。

どんなリスクがあつたとしても、それでも私はやりたかつたのだ。人を助ける事。誰かの役に立つと言う事を。

「えへへ。そりゃあ、覚悟なら、あの時杏子さんの教会に行つた時から決めてましたから」

私は振り返つて告げる。

杏子さんも自分の身の上話を聞かせてくれた。家族の為を思つてした事が裏目に出て、全てを喪つたお話。この人はずっと、それを背負い続けて来た。最初に思つた通り、やつぱり優しい人だつた。

「ちつ………良いか、魔法少女になるからにはみっちり鍛えてやるからな、覚悟しなよ

「？」

「はい！よろしく願います！」

大きな声で元気に言ってから、私はキユウベえの方に向き直った。

「…………ハッスル、ハッスル…………」

深呼吸をして、その後なるべくみんなに聞こえないように、小声で口の中で呟く。

お母さんが教えてくれた、ここ一番、気合を入れなきゃならない時に使う、呪文みたいな物だ。

「解き放つてご覧…………君のソウルジエムは、どんな願いで輝くのかい？」

キユウベえが私に告げる。無表情な声が今は却つて巖おごそかに聞こえた。

願いなんて別にナシでも良いが、叶えてくれると言うのならあの事以外にはない。

「私の願いは、あの時私を助けてくれた、あの人に…………！」

☆ ☆ ☆ ☆ ☆

「もう一度、あの時私を助けてくれた、あの魔法少女に会いたい！」

——胸の中心に触れられる感覚があり、その後——

目を開けると、私は真つ白な空間に出た。

と、最初は思ったが、すぐに真つ白なんじゃなく、この場所が放っている強い光にまだ目が慣れていないんだと理解した。

目を瞑るな、先に進まなければ。

私は遙か遠くにある蒼い人影に向かってまっすぐ突き進んだ。

「あの、すいません！」

数メートルまで距離を詰めた後に声をかけると、あの時とまるで変わっていない、ショートカットのあの人は、きよとんとした様子で振り返った。

胸が一杯になって、つかえて上手く言葉が出て来ない。

「あんた……………」

「あの、あの、私あの、昔貴女に助けて貰った、」

「……………ああ！あの夜の……………」

「はい……………」

「……………ふふふっ」

「？」

「いやね、随分良い笑顔する様になったなと思ってね……………そっか。幸せな人生を手に入る事が出来たんだね？」

「はい。貴女と会えた……………お陰です」

「あんたも魔法少女になったんだ。って言うか、口調が随分丁寧になったねえ」

「やつぱり恩人とはちゃんとした言葉遣いで話したかったから……」

「恩、人か……」

「えと、お名前、聞いても良いですか？ 私は、芽育奈尾つて言います」

「あたしは、美樹さやか」

「みき、さやか、さん……」

……あの時は本当にありがとうございました。自棄やけになって、ただ不満をぶつけてただけの私の話を真剣に聞いて下さって……とても、嬉しかったです。さやかさんが居てくれたから、私は……今、こうして生きて行ける様になったんですよ」

……やつと伝えられた……！

この瞬間を、ずっとずっと待っていた。

「……ごめんね、あの、ちょっと……っ」

感極まってしまったのか、さやかさんが顔を押しえた。

さやかさんはあの時、よくは分からないけど、深く悩んでいたんだろう。今も悩んでいるのだろう。あるいは、悩みのない人間なんていないのだろう。

だから、拙い言葉でもいい、私の口から教えてあげたいと思った。貴女に救われた人間が確かに存在する事を。彼女と同じ魔法少女になりたかったのは、そう言う理由もあつた。

『——生きてるってどういう意味なのですか?』

その時だった。耳にさやかさんではない、誰かの声が聞こえた気がした。

気のせいかと思っただが、そこから一気に知らない誰かとだれかとダレカと誰かと誰かと誰かと——

『誰だ?』『どうやツテココニ来た?』『ちいさくてカワイイー』『ダレダ?』『ダレだ?』『わたしたちと『同じ』じゃナイ?』『だあれ、ドチラサマー?』『おなまえはー?』いくつ?』『誰だ?』『やめようよ、こわがってるよ』『ダレ?』『だれ?』『生きている?』『さやかばっかりずるい、アタシもはなさせてヨ』『私達と同じじゃない?』『ドウシテここに?』『何でさやか泣いてんの?』『どうしたの?みんなどうしたの?』『フーアーユー?』  
 そして私は、いつの間にか妖怪みたいな謎の生物の大群に周りをぐるりと取り囲まれていた事に気付く。

「……………うわああああああああああああっ!!」

腰が抜けた。人間の悪夢から抜け出して来たかのような姿をしたそのイキモノ達は、二つとして同じ姿をした者はおらず、まるで人間そっくりにお喋りをしていた。

魔獣とは違う、じゃあこいつらは一体…………

その中の数匹が、泣き出してしまったさやかさんに寄り添う。

「……………何だよお、もお。みんなして集まってくんよお。暇かよあんたらあ」

あの、すいませんさやかさん、何でこの状況下で照れてる以外の反応がないんですか……………と言おうとしたが、口がぱくぱく動くだけで「あ、あわわわ……………」みたいな、情けない言葉しか出て来なかった。

「……………みんな、下がって」

今度は、何処か高い所から、さっきのとは雰囲気の違い、澄んだ声が聞こえて来る。バケモノ達がそれに反応し、一斉に動きを止める。

バケモノの群れが私達から離れると上空の視界が広がり、何も無いと思っていた空中にあつた物に目が行った。

ベッド。巨大なベッドが、数本のロープで吊られて空中に浮かんでいる。

『エンカンさま』『えんかん様だ』『えんかんさまがなにかいうぞ』

……えんかんさま？

何かを思い出せそうな気がした。

高空のベッドの上から、誰かがびよこつ、と顔を出して、下を覗いている。

「驚かせてごめんさい。あなたのお話を、もっと聞かせてほしいな。」

あなたにお願いしたい事があるの」

遙か下からでも、金色の瞳が輝いているのが分かった。

## 11 煮える海、割れる大空、終わる大地

はじめに、願いがありました。

どんな伝説でも、どんな物語でも、いつも始まりは誰かの願いでした。

人々が困難に直面して立ち止まる度に、小さく純粹な願いが、祈りが、みんなの希望となつて道を拓ひらきました。理由なき悪意から弱き者を守りました。

しかし、願う者達が報われる事はとても稀まれでした。

それどころか、時には願いから生まれた力が、それに救われた筈の者達から恐れられたり、良からぬ事の為に利用されたりする事さえあり、願う者達はその純粹ゆえさ故に皆心を真つ黒に濁らせ、「絶望」と言う名の怪物を生み出して消えて行きました。

女神さまはそんな魂達を憐れみ、雨の様な涙を零ほしました。

かわいそうに。かわいそうに。

女神さまは穢けがれてしまった願いの残滓ざんしを一つ残らず拾い上げられ、それから願った者達の魂が誰も憎まず、ずっと安らかに過ごせる天の国をお創りになりました。

——文字通り、世界の果て。

過去、現在、未来。過去、現在、未来——無限に広がる真つ暗な空間の中に、あらゆる世界が生まれてから滅ぶまでの瞬間が凝縮されて詰まっている。そしていと高き、それらの景色全てを見下ろせる程高い位置に、眩い光を放つ太陽の様なエネルギーの塊が浮遊していた。

その周りを浮遊する、太陽に対する地球の様に小さな魂の一つが声を発する。

「……………長かったねえ……………此処まで来るのに」

「うん」

太陽が短く答えた。

因果律さえ捻じ曲げる程の願いによって新たに創り直された世界、その全ての日々では、生涯を終えた魔法少女達は呪いに取り憑かれず、望まず誰かを憎んで苦しむ事は無い様に見えた。しかし…………

「でも、取り敢えずこれでお互い、オツカレサマって事だよね？」

「ううん、まだ全然終わってないよ」

「？」

「確かに、創り直す前の世界で魔女になる運命にあつた子達は全員連れて来られた…………でも、わたしはその為に世界の在り方を大きく変え過ぎちゃったから…………その影響で、

新しく魔法少女になった子や、魔女になりそうになっている子が、これから出て来るかも知れない。

ううん、沢山出て来る。わたしには分かるの」

「その子達もみんな救うつもりなの？まどか一人がやらなきやいけない事なのかな……それは」

「やめる訳には行かないよ。これはわたしが自分で選んだ道だから……」

…そろそろ行かなくちゃ。押し潰されそうになっている魔法少女を探しにいかないといと……」

その時、太陽が震えた。

その振動はわずかながら全ての世界にも伝わり、大地が震えた。

「……………まどかか？どうしたの？まどか!!」

太陽が傾く。翳る。バランスを失って、真つ逆さまに墮ちて行く。

その様はある世界からは単なる日食として見えたかも知れないし、またある世界では「暗黒時代」と呼ばれたかも知れなかった。

エネルギー体は、何処の世界の何時の時代かも知からない砂漠に墜落した。

その時にはもう、太陽の様な光を放っていた大いなる存在は、何処にでも居る女の子位に小さくなつてしまつていた。

「まどか、しつかりして、まどかっ!!」

さやかが声をかける。まどかの背中から生えた翼は、擦り切れて殆ど羽根が抜けかけていた。

「あんた……こんなに自分をすり減らして……!」

「ううう……っ!」

いか……なくちや、みんなの……ところ……!

たいへんな……こと……!」

## 12 @マジック天国

「え、過労? 『円環の理』がですか!」

異形の集団から思わぬ歓迎を受けた私は、その後最初に居た真っ白な場所に繋がる別の空間……地平線まで続く花畑の真ん中に白いテーブルがぼつりと配置された世界に通された。

「うーん、せめてエネルギー切れてって言ってあげてくれないかな」

私と一緒にテーブルに腰掛けたさやかさんが困った顔で言う。私達が話している間に顔がペロペロキャンディーになったウエイトレスが大きなケーキを運んで来てテーブルの真ん中に置いて行つた。

「す、すいません……いやでも、『円環の理』って、厳密には違うだろうけど神様みたいな物なのかなって、私はイメージしてたんですけど……」

「まあ、なりたてだし、ね」

ね、と言いながらさやかさんが「その人」に話を振る。白いパジャマの様な格好をした女の子が、あはは、と照れ隠しの様に笑う。

この場所に来た時に、私はようやく思い出した。ママさんの口からちらりと聞いた、

戦いの一生を終えた魔法少女を安息の地に導く女神——『円環の理』。さやかさん達の話では、何だか嘘みたいな話だが、この人がそうらしい。そう言う概念みたいな物が人間に分かり易い形をとって具現化した姿だと……なりたて？なりたてとは何だ。

「手分けして出来る事まで全部一人でやろうとするから倒れたりするのです。『円環の理』ともあろうお方が、少しは人に頼る事を覚えるのです」

その時、私とさやかさんと『円環の理』以外にテーブルに腰掛けていたもう一人が、唐突に言った。リスやモモンガを思わせる茶色いふわふわとした衣装に、羊毛に似たもこの髪の毛。大口を開け、一切れのケーキを丸ごと一口で食べた。

モモンガみたいな人にびしやりと言われると、『円環の理』は縮こまって「ごめんなさい……ほんと、ああなると思わなくて……」とごによごによ呟いた。何だかなー、どうも威厳に欠けてる気がする。さつき聞いた話だと、どうやら今は力を失っている状態、と言う事になるらしいんだけど。

「……『円環さま』？は頑張り屋さん、なんですかね？」

「え……どうなんだろ。自分じゃよく分からないや」

私が話しかけると、円環さま（何か良寛りょうかんさまみたいなノリでこう呼んじやつたけど、まあこの呼び方で良いだろう）はちよつと恥ずかしそうに答えた。外面的には。ただ、内面は読めない。どんな人（？）か内側を覗こうとすると、奥が深すぎて丸でブラッ

クホールの様にこつちが吸い込まれて行きそうになる。

「円環さまが力を失って、魔法少女の魂を連れて逝く事が出来なくなつて……そんな事になつたら、どうなるんですか？」

雰囲気から察するに、まあ恐らくろくな事は起きないんだろう。少しの間みんなが黙っていたが、やがてさやかさんが口を開いた。

『『円環の理』はこの子……『まどか』だけじゃないよ。あたしも、そこにいる『なぎさ』も、かつて導かれて『円環の理』の一部になつてる』

『『円環の理』に導かれ……その言葉を聞くと、胸がキュウツと絞まる様な気分になつた。』

「やっぱり……さやかさんは……もう？」

本当は聞くまでもない事だ。彼女はもう、とつくの昔に現世での役目を終えたのだ。

「ごめんね……あたしに、会いに来てくれたんだよね？ ありがとう……あつちで、待つてあげたかつたんだだけ」

「……さやかさんは、ちゃんと悔いのない人生を送れたんですか？ 『今』に、満足してますか？」

彼女は、一瞬だけ目を伏せはしたが、すぐに笑顔で答えを返してくれた。私を元気づけてくれた笑顔で。

「……もちろん！やれる事を、全力でやりきった上で燃え尽きたからね」

「……そっか。なら良かったです。やっぱりさやかさんは最後までさやかさんだったんだなあ」

「褒めてんの？それ」

「もちろん。めっちゃ褒めてますよ」

何時の間にか私の顔にも、彼女と同じ笑顔が移って来ている感じがした。

ああ、今まで私は、自分が魔法少女魔法少女になりたい理由を、何となくさやかさんみたいになりたいからだとしか思っていなかった。でも違った。この笑顔を、さやかさんから貰ったこのキラキラした暖かい気持ちを、もつと沢山の人に届けたかったからなんだ。

「何のお話をなさろうとしてらしたのでしたっけえ？」

なぎささんが大きく咳払いをしながらそう言ったので、私達は本題に戻る事にした。

「人生に満足して、自身の終わりを完全に受け入れている魂を連れて逝く事なら、実はあたしたちにも出来るんだ。ただ、その魂にこの世への強い未練がある場合は、あたしらとは違って実体のあるだけかがそれを解消して、現世との結びつきを断たなきやならない」

「魔法少女の魂が『円環の理』に導かれないと、何が起こるんですか？」

「……現世に留まり続けた魔法少女の魂は、『魔女』に化ける」

魔女、と言う言葉が出た時、心なしか三人の表情が少しだけ暗くなった。どうしたんだ？

「……魔法少女の大人版って訳じゃ、ないんですよやっぱ……『魔女』って、もしかしてさつきも居た……」

「あの子達は好きであの姿をしてるだけだよ。本来魔女には意志がないの。」

魔女は魔法少女の絶望から生まれる怪物。人の心を惑わしたり、誘き寄せて喰ったりする。しかも際限なく増えて行く上に、目に見えない」

「何でそんな事を……元は魔法少女だったんですよね？」

「死ぬ間際の、悲しみや憎悪が固定されちゃうんだよ。そして、それ以外の事は考えられなくなる。」

魔法少女が一度魔女になってしまったら、もう二度と元には戻れない」

「魔法少女の幽霊……？」

「その認識は正しいかもね」

「……何か、魔法少女とは真反対ですね」

失礼かもしれないが、思った事が口についてぽつりと出た。

何も分からずに異形の姿で闇を振りまき続ける気持ちはどんな物だろう、と私は想像

する。

いや、今の話からすると、「気持ち」なんてないのだろう。すると今度は自分がそういう存在になる想像をしてしまい、ゾツとした。

「……そんな事がもう二度と起きない様にする為に、貴女の力を貸して欲しいのです」  
モモンガ、じゃないなぎささんが静かに告げる声で私は現実に戻した。私の力？

「全ての魔法少女は、それぞれの願いから生まれた固有の魔法をもっているのです。『誰かの怪我や病気を治したい』と言う願いなら治癒。『過去に戻りたい』なら時間操作。

『さやかに会いたい』と願った貴女は……結果的に生きながら『円環の理』に来てしまった貴女は、わたしたちの見立てでは、どうやら『現世と霊の世界を行き来出来る能力』……つまり、霊を見たり、『円環の理』にジャンプしたり、戻ったり出来る力を身に付けているのです」

「そう言う事ですか……」

つまり、生涯を終えはしたが、この世にまだ未練がある人に対し、魔女になる前に『円環の理』に誘導<sup>ナビゲート</sup>する。

身体を持っている私が未練を解き、さやかさんたちが未練のなくなった魔法少女達を連れて逝く。

『円環の理』の役目の一部代行——そう言う「仕事」を頼まれているのか。

「奈尾にはまたまどかが力を完全に取り戻すまでの間『円環の理』直属の『ソウルナビゲーター』になって欲しい……なつてくれたら凄く助かる。でも、他の方法だって、もしかしたら探せばないとは限らない。

本当ならこれはあんたがやるべき事じゃないんだ。ただでさえ魔法少女もやってるんだしね。

あんたはあんたが好きな様にやれば良いと、あたしは思うの」  
帽子を取つて、じつと見つめながら考える。

さつき鏡で見たが、魔法少女としての私は、肩から鞆かばんを提げた、ホテルマンか、郵便配達員みたいな格好をしていた。

さやかさんはきつと、うんと気を遣つてそう言つてくれたのだと思うけど、私は寧ろ嬉しかった。

私にしか出来ない「仕事」がある。笑顔の届け方がある。恩人と一緒に。  
あれこれ考えるよりも、直感を信じた方が楽しいし、私らしいと思つた。

「……ナビゲーターの仕事、お受けします！心配しなくたつて平気ですよ。魔法少女もナビゲーターも、私がやりたいと思つてする事だから……

さやかさん、もう一度、一緒に頑張つてくれませんか？今度は近くで」

「……………うん、そうだね……………よし！分かつた！」

「これからよろしくね！それから……ありがとう、奈尾！」  
「こちらこそ、よろしくお願いします!!」

## 13 渡物語ワタシモノガタリ

こちらこそよろしくお願いします、とさやかさんたちに告げた後、来た時と同じ様な白い光で目が眩んで、気がついたら路地裏で大の字に倒れていた。

薄く目を開けると、杏子さんたちが心配そうな顔で、或いは心底驚いた表情で私を見下ろしているのが見えた。キュウベえはやっぱり無表情だった。

「芽育……さん？大丈夫？」

体に力が入らない私を、ママさんが助け起こしてくれた。

まだ完全に頭が働いてない私は、しまらない口調でママさんに尋ねた。

「……私、さつきまでどーなっていました？」

「キュウベえに願いを言った後、急に芽育さんがいたあたりが強く光って、気がいたら芽育さんの

姿が消えていたの。どこだどこだって慌ててみんなを探したんだけど、その後もう一度辺りが光って、またもとの位置に芽育さんが現れたわ。ほんの数秒の出来事だったけど」

アバウトな感覚だが、『円環の理』の中には少なくとも三十分以上は居た筈だ。現世と

あちらでは時間の流れる早さが違うのだろうか。

何だか長い夢を見ていた気がしたが、現に私の手の中にはソウルジエムがある。磨き込まれた様な金色で、皿に乗った卵のような宝石の上に、乾電池みたいな小さなシンボルがちよこんとくつついている。

自分のソウルジエムをギュツと強く握りしめてみた。さやかさんと再会出来て、これからも合える

と言う事。ナビゲーターという、大事な使命を引き受けてしまった事。色んな事が頭の中をぐるぐるして、今はまだ考えがまとまらない。家に帰ったら、ゆつくりと向き合う事にしよう。

「一体何が……?」

珍しくプチパニックを起こしているらしいほむらさんに答えて、杏子さんが呟いた。

「だからさ、会って来たんだろ、その、恩人とやらに」

☆ ☆ ☆ ☆ ☆

私が契約を終え、晴れて魔法少女になった後、さて、私が少し休んだら早速魔獣退治に行こう、どうすればいいか分からないだろうから今はまだ見ているだけでいい、まずは体験授業だ、という段になったが、それを待ち構えていたかの様に、いきなりザーツと、バケツをひっくり返したみたいな雨が降り始め、

『ちよつと……やつ、やだつ、雨だなんて天気予報で言つてた!』

急遽みんなで雨宿り出来る場所を探し、この後の活動について緊急会議となった。

『あたしやもう帰りたいね。こちとらまだ蓄えはあるんだ。あんたらもこんな雨ん中歩き回つて、風邪でも引いたらそれこそ大変だろ』

『そうしたい所だけど……でも天気が悪いと、人の心が不安定になるから魔獣が出やすいじゃない? 一匹でも二匹でも、増殖されないうちにいたら潰しておいた方が、

……分かつた、じゃあ今日はお休みにしましょう。私は軽く街を見回つてから帰るわね』

『私も同行させて貰うわ』

『あら、ありがとう曉美さん』

マミさんが魔法のリボンを束ね、鮮やかな黄色い傘を作り出してさす。ほむらさんを傘の下に誘つたが、ピイツとそっぽを向くほむらさん。マミさんはちよつとだけしよんぼりとしながら、もう一本傘を作つてほむらさんに渡した。それから、杏子さんと私も傘をくれた。

『……あーもう、分かつたよ。あたしも行く。奈尾を家まで送つて行つたらな。

奈尾、あんたはもう家に帰りな。あんたには色々教える事はあるが、そいつはまた今度だ』

☆☆☆☆

ということがあったのが一週間位前かな？

私は家の——私をちゃんと家族の一員として受け入れてくれる、何も気を遣う必要のない日番谷の家で、自分の部屋でゆったりごろごろしながら、マンガやなんか見たりしていた。

私は数日前、ナビゲーターとしての初めての仕事を終わらせたばかりだった。山音さんと言う、ちよつと不安定な所もあつたがとつても優しくて、そして他の人にない物を持つている人を担当した。

最初は上手く行つていたかと思つていたが途中でヤマネさんの思わぬ事情が発覚し、最終的にかなり強引な方法で何とか無理矢理収集をつけた。

正直言つて、いい仕事をしたとは言えないと自分では思う。私は最初、ヤマネさんが心に抱えている闇の気配を薄々感じつつも、気づいて対応する事が出来なかつた。いつもあんな事では、死者の魂を導くナビゲーターなんてやつていられない。

もつと経験を積まなきゃ。ナビゲーターとしても、それから魔法少女としても。もつと人が助けられる様になりたい。そうしてもつと周りに広げて行きたい。

あの日、さやかさんに貰つた、暖かい気持ち……

そう思つたら、何だか急に不安になつて来た。これがプレッシャーと言う奴か。

家にいる時はのんびりして英気を養いたいのだが、一度考えだすと不安感是我的心を侵食していき、段々マンガの内容も頭に入らなくなつて来た。

私、大丈夫かな。うまくやつて行けるかな。

その時だった。

「奈尾く、お〜い」

部屋の外から呼ぶ声が聞こえた。

「は〜い」

「お母さん、どうしたの」

このお母さんと言うのは、もちろんこの家に最初から住んでいる、「今の」お母さんだ。

あつこは両親の事を「たんたん」「まーちゃん」とまるで友達の様呼ぶ。

最初は私もそう呼んでいいよと言われたのだが、流石にいきなり「まーちゃん」とか

はハードルが高く、かと言って、「拓真さん」「摩耶さん」ではよそよそしすぎる。

最終的にスタンダードに「お父さんお母さん」に落ち着いた次第である。

「いや、今、宅配便?が届いてき」

「宅配便がどうかした?」

「奈尾宛てに」

「え?」

お母さんが指さした大きな段ボール箱に目をやる。

一見普通の宅配便に見えるが、確かに私の名前と住所が書いてある。孤児院の住所じゃなく、お父さんやお母さんの名前でもなく。

私がこの家に来てからまだそんなに日にちは経っていないというのに、一体誰が私に荷物なんか送って来たんだろう。そう思いながら差出人の名前を見て二度驚いた。

「ヤマネさん!!」

「友達?」

差出人の名前の所にはなんと「渥美山音」とだけ書いてあり、住所は空欄になっていた。

お母さんの話によると、チャイムに答えて外に出てはみたが誰もおらず、家の前に荷物だけが置いてあったらしい。

「取り敢えず、開けてみちやったら?」

思いがけない贈り物にびっくりしつ、お母さんに言われてテープを剥がして箱を開けてみると……

「わあーっ、さくらんぼだあ!」

箱の中にはつやつやとした大粒のさくらんぼが、綿に包まれて一杯に詰まっていた。

それから、便箋に綺麗な字で書かれた手紙も。

「芽育奈尾さま

暑さもだいぶやわらいでまいりましたが、いかがおすごしでしょうか。奈尾ちゃんの住んでいるまちでも、おひさまは照っていて、ひまわりやあさがおの花は咲いていたでしょうか。

突然おくりものをさせていただいてごめんなさい。この前はおせわになったから、どうしてもあらためてお礼をしたかったんだ。

奈尾ちゃんが守ってくれたあの山の自然は、わたしだけじゃなくて、市のみんなにとつての宝でした。これからもずっと守られていってほしい。守られて行くと信じてる。

おかげでわたしも、未練なくここまで来ることができました。

そんな感謝のきもちをこめて、野乃中市の名物のさくらんぼを送らせてもらいました。

いつか、もういちどわたしのまちにきてほしいな。派手なものはないけど、きつところがかやすまる場所だとおもうから……

奈尾ちゃんの健康とご長寿をこころからおいのりしております。

かしこ。

渥美山音

「つまり仕事の報酬……って事かなあ」

「なになに？ 奈尾の学校の話？」

つい、口をついて出た独り言にお母さんが反応したので、笑って誤魔化した。

まあ、何とかなるだろう。改めて感謝の気持ちを受け取ったら、何だか急にそう思える様になった。

大丈夫だ。きつと一つ一つの仕事に真剣に向き合ってさえいけば、相手に気持ちは伝わる。

ハッスル、ハッスル。やるしかないなら、やり切るだけでしょ？

そんな感じで、私は明日も生きて行く。みんなを助ける為に。

奈尾は山音から報酬としてさくらんぼを手に入れた ▶

お仕事完了。お疲れさまでした ▶

まだまだ新人ですが、これからの仕事もよろしくお願いします！ ▶

？個人情報に付き持出厳禁

名前：芽育奈尾めくみなお

年齢：13

出生地：風見野市 にしかぜく 西風区

はながおちよう 花ヶ丘町

(現在の活動拠点は見滝原市)

誕生日：12 / 12

血液型？A

好きな物事、趣味：中華料理、特に杏仁豆腐。ハンバーグ。ボーカロイドが歌う楽曲、好きなPはれるりり、じん、ナユタン星人。ラブライブ！のアニメ。歌やダンス。ジャンル・年代問わず漫画全般、特に好きなのは「僕のヒーローアカデミア」。V t u b e r の月ノ美兔。たこパ、即ちたこ焼きパーティ。他、多趣味。

嫌い・苦手な物事：あらゆる豆類、特にグリーンピース。うなぎ（うなぎそのものも、食べるのも）。上から目線な相手。自分を甘く見られる事。叱られる事。球技全般、特にバスケット。絵を描く事（壊滅的）。

口癖：「ハッスル、ハッスル」

特技：歌。こぶしやビブラートも綺麗にこなす他、喉がかなり丈夫でいくら大声を出しても声が枯れない。

ソウルジエムについて：単一乾電池に似た形をしており、帽子に収まっている。タイガーアイの様な金色。

武器：ペン。空中に魔方陣を描き、そこから火炎弾を発射する事で攻撃する。また、ペン自体を剣や槍に変形させる事も可能。

契約時の願い：「かつて自分を助けてくれたさやかにもう一度会いたい」。結果的に『円環の理』までワープしてしまった。

固有魔法：「霊なる世界への干渉」。『円環の理』までジャンプ出来るのみならず、霊的存在を視認したり、自身が霊化する事も出来る。生と死を越えたイレギュラーな能力であると言え、ソウルナビゲーターとしての仕事に役立っている。

明るく前向きで、思考がシンプル、ちよつとドジな所もあるが、あまりくよくよと悩んだりしない性格。

そうした現在の性格があるのも、暗い過去を乗り越えた経験があればこそである。抑  
圧されていた時期からの反動か、好奇心が強く、興味を持った物には取り敢えず手を出  
してみるタイプ。

常に他人の顔色を窺う事を強制される環境にいたせいか、相手の本質や善悪を見抜く  
洞察力・共感能力に優れている。

かなり器用で、大抵の事は一時間習えば基礎は覚えてしまう。

同じ年の子と比べても背が低く、見た目が幼い。

記述：さやか

### 第3話 操つばめ、14、高原市

#### 1 よくもこんなマジアレコードを！

少しは友達を信じてよ

空の星に負けじと、赤や緑に輝く高層ビル。

だが奈尾達のいる見滝原市とは違い、この街には海から吹く風が潮の香りを運んでくる。

ここは、神戸市。多彩な人々と、不思議な噂で成り立つ街。

そんなこの街で、月のない夜、花火ならぬ火柱が大地から吹き上がった。

「うわあああつー！」

「くっ、きやあああつー！」

火炎を噴き出す。腕を振り回し、周囲を破壊する。

そんなまるで怪獣の様な相手と戦っているのは、意外なり、二人の少女であった。

「くくくッ！ やちよさん、平気だったか!!」

髪をポニーテールに結った片方は鎧に身を包んでいたが、身軽で、肌が出ている部分が多く、騎士と言うよりかはどちらかと言うと古代ローマのグラディエーターの装備を女性らしくした様な装いである。剣、と、呼ぶべきなのだろう、でかい鉄板に持ち手を付けた様な、大雑把な得物を地面に突き立て、その陰に隠れる形で自分と、もう一人の仲間を庇った。

「ええ、大丈夫よ……ごめんなさい、庇って貰っちゃって……ただ、それでも大分余波があつたわね……」

やちよさん、と呼ばれた、その後ろの年長の少女が呻いた。身体と半ば同化した、半液体状の神秘的な服で身を包んでいるが、動きを阻害しない程度に鎧も着ており、やはり戦いの為の装束である事が分かる。こちらは独特の形状の、槍に似た長物ながもので武装している。

その時、二人に手痛い攻撃を浴びせた敵が何処かに歩き出そうとした。槍を持った方が相手に踊りかかる。

『邪魔しないで』

「行かせない、市の外に出す訳には行かない!」

彼女達魔法少女にはそれぞれ担当する土地、言い換えれば縄張りが存在する。例え逃

がした相手を追いかけるためだとしても、他所様の土地に無闇に立ち入る事は、縄張りの主を刺激してしまう事を意味する！

『あなたたちの事情なんか知らない！』

敵はやちよを振り払おうと、鋭い攻撃を連続して繰り出す。が、やちよもさるもの、攻撃を紙一重で躲しながら、敵の周りを素早く旋回しつつ反撃を繰り出した。

『この……ッ！』段々と敵の意識が彼女に集中していく。

やちよに完全に気を取られていたそいつは、彼女を飛び越えて上から飛びかかって来たもう一人に気付かなかった。

「おりやあぁー………！！！！」

『うわあッ！』

咄嗟に両手に持った武器で受け止めたが、二つともへし折られてしまった。

「へっ、どんなもんだっ！」

「ももこ！ 気を抜かないの！」

ももこと呼ばれた少女が得意げな顔で言うが、すぐにやちよにたしなめられてしまった。何か言おうとするももこだったが、すぐに、先輩の言う事は素直に聞くべきだと思いき知らされる事になる。

『グルルルルルッ………！』

押し負け、地面に尻餅をついた敵が不気味な唸り声を上げ始めた。

荒い呼吸と共に口や、服のすき間から炎がシューツ、シューツと噴き出し、徐々に身体を包んでいく。

「何やって……」

「炎を……纏っている……?」

『そうだよ』

彼女達の敵は、立ち上がり、どんどんその姿を大きくしていった。やがて、そいつを包む炎は、耳まで裂けた口に鋭い牙を生やした恐ろしい形相の怪物の形をとる。

『ザコ共があ。手加減してやってたからって調子乗ってんじやねえぞ』

そう言うのと、炎の怪物は大きく息を吸い込み始めた。次の攻撃を受けたらヤバイ……やちよとももこが身構える。

『アタシは最強。この土地の王だ。<sup>REX</sup>逆らう奴は……ヒヒヒツ、死刑にしてやるよ……』

逃げて距離を取るよりも早く、視界を埋め尽くす程の大量の炎が吐き出された。お互いを庇う暇もない。熱は風を呼び、二人は凄まじい温度に弄ばれた。

『がおろろろろろあツツツツ!!!』

!!! 『ごおおおおおあああああああつ!!!』

やちよが目を覚ますと、ももこも自分と同じ様に、近くに倒れて気絶していた。

「ももこー！ ももこー！ しっかりして！」

「う……………ん……………」

陸おかに上げられたタコよろしく、全身ぐったりとして力が入らないももこ。彼女もやちよも変身が解け、服の端が焦げていたり、顔に魔法少女の驚異的な治癒力によって火傷が治った痕があったり、酷い有様だった。

「ほら、大丈夫? 生きてる?」

「もうすぐ死んじゃうか……も……」

「……冗談でも死ぬなんて言わないの」

「はは……ひどいな……やちよさんが先に言ったんじゃん」

肩を貸して立たせて貰う。

「あいつ……逃がしたの……?」

「ええ……でも、取り敢えず今は一旦休む事にしましょう。私も……ぐっ……相当キツ  
いし……みたまの所で診て貰った方が……」

やちよが澄んだ瞳で空を仰いだ。風が長い髪をなびかせる。ついでにその風に乗つて、鋭い雄叫びが聞こえて来る気がした。

『がおおおお……ん……』

「……なるべく早めに回復して、隣の市に連絡を取らなきゃね。あれを野放しにしたら……何が起きるか分からない」

## 2 思い出ボロボロ

『……………ふん、ふん……………』

あの時あたしが口ずさんでいたのは、何の曲だったつけ。

子供の様ように追いかけてっこをしながら。

『……………ら、ららららん、らん、らんらんらん』

ああ、『くるみ割り人形』の『行進曲』か。未練だねえ。今でも鼻歌を歌うと、まず出て来るのはクラシック曲だ。他の子はK-POPとかドラマの主題歌歌ってるのにさ。全く勘弁して欲しいや。ははは。

『らった、らった、らった、らった♪らった、らった、らった、らった♪』

……………白と黒だけの世界。

くしゃくしゃにした紙みたいな空に、人間の目の様な赤い太陽が浮かんでいる。

軽やかなスキップで追いますがって来る黒い触手から逃げつつ、鼻歌混じりに剣を次々相手に投げつける。

蹲うずくまった女性の形をしたなにかの影が、刃を突き立てられて血を吹いた。

ふと、脇腹を見れば、鋭く尖った枝がぐっさり刺さっている。

痛みが全くないのが何だか笑えて、本当に面白くなって来ちゃって、腹から抜いた枝で、もう二・三か所、胸や腕を刺してみた。どくどくと血が溢れ出し、それを手ですくって顔に塗ったくった。

まどかは結界の隅の方で、自分の身体を抱えてぶるぶる震えてる。

杏子は口を閉じるのも忘れて突っ立ってる。

『だん♪だだだだん♪だん♪だんだんだん♪』

機嫌よさげに歌いながら、まだびくびく動いている黒い塊を剣でばんばんぶつ叩く。

……何やってんだろうな、あたし。

やがて魔女の死体は動かなくなった。

『……………はあ、痛みを消せるってのも中々面白いもんだね』

あたしがそう呟いた瞬間、それから鋭い刃が飛び出した。

『……………んー？ どうなったんだ？』

口ではそう言っていたが、本当は分かっていた……

い。魔法には巨大な槍が突き立てられ、完全に事切れている。杏子がトドメを刺したら

……その隣に、首を失ったあたしの身体だけがぼへつと突っ立っていた。

身体をこつちに呼び寄せ、落ちて転がってる頭を拾わせる。不思議な感覚だった。

すぐにくつつけようかと思つたが、その時ふと、まどかがこつちを見て固まつてるのに気づく。泣きそうな顔が、ちよつとだけ嗜虐心を刺激して、イジつてやりたい気分が湧き起こつた。

『ははは、何だこれ、ウケる。見てみまどか、ほれ、ほれ』

ヤケクソになつてるあたしは自分の首をまどかに投げてパスするふりをしたり、首をわざと変な角度に付けて見せたりする。

その度にまどかはひいひい、とか何とか悲鳴を上げた。

『いい加減にしろよ……!』

そんな事をやつて遊んでいたら、変な角度、後ろ斜め60度位の位置から声がする。

首を付け直して顔を真正面に向けると、杏子に胸ぐらを掴まれていた。

『いくら身体から魂を抜かれたからつてな、進んで人間を捨てようとしてどうすんだよ』  
『他人の事なんかどうでもいいってのがあんたの流儀じゃなかつたっけ？ あたしの事もほつてよ』

突っぱねた。突き飛ばして、手を放させた。ついこの間まで冷血ぶつてたくせに、ぶつきらばうな言葉の端から見える善意がウザくてしょうがなかつた。

杏子はちよつと言葉に詰まったが、放っておいてくれようとはしなかった。

こいつの事情は聞いた。あたしとは思考回路が違うだけで、悪い奴ではないんだ。……分かつてるけど。

『……目障りなんだよ。あんたみたいなぶつ飛んだ奴が近くにいたら……』

『おまえ何様だよ。佐倉杏子』

だけど、あたしももう少いで限界の所で、最後の意地が残つてて、おそろおそろ差し出された素直じゃない好意をぶん投げてしまった。

『あんたに何を言われようが、人を襲う魔女を倒してるだけあたしの方がマシでしょ？ あんたみたいなの……他人の命だろうが平気で犠牲にする、クズみたいな魔法少女が多すぎるから！ あたしが埋め合わせをしなくちゃならないんだっ！』

あたしは最後まで正義の味方でいなくちゃならない。

目に涙が溜まってても、先輩に託された意志を無駄にしない為に、こいつみたいに現実にあつて生きてる訳には行かなかった。

『ほんとの人でなしってのは！ あんたみたいな奴を言うんだよ！ ばーか！ 魔女に喰われて死んじまえ！ ……まどか行こう、もう用は済んだ』

子どもみたいにぶちまけると、涙をさっと拭いてあたしはそっぽを向いた。

結果がゆっくり崩れて行く中、あたしはとつと歩いて行こうとしたが、急にクラッ

と来て転びかける。まどかがあたしの身体を支えてくれた。

『あー、ありがとう』

豪雨が暗い夜を洗い流して塗り替えようとしてる。

あたし達の戦いは、誰にも知られず、闇に溶けて行く。

帰り道の間、まどかはずっとあたしに話しかけて来た。

『さやかちゃん、あんな戦い方ってないよ……』

『しょうがないよ、あたしまだ弱いんだから』

『でも、あんな事続けてたら、さやかちゃんがどうにかなつちゃう……』

『どうせもうヒトじゃないんだから同じなんだってば！』

どうしてあなたたちはかえすものないあたしにそんなにやさしいの？

あの頃のあたしは、自分の中の矛盾と戦ってたなあ。

本当は、刺々しい言葉ばかり振り撒きたい訳じゃなかったのに。

そしていい友達に一番恵まれていた時期でもあった。

記憶って厄介なもんだね。ひとつ思い出そうとすると、余計なのがいつぱいついてくる。

忘れたいけど記憶に焼きついて離れない。っていうか忘れちゃいけない。

もつと色々やり方あっただろ、あたし。黒歴史だな。

あー、やっぱやめよう、この話。また謝りあいになっちゃうよ。

……最近思うのは、あたしは世界なんか全然守れてなかったし、大したもんも残せなかった。それでもさ。

これから世界を救う誰かの力になる事はできると思うんだ。

奈尾はね……あの子が生きていてくれるからさ、あたしがしてきた事は無駄じゃなかったんだって、思う事ができるんだ。

……わたしもいつぱい救われたよって？ ふふふふ、ありがとう。

あの子は、責任持ってあたしが面倒見るから。